
インフィニットストラトス～青空に向かって歩け～

八角ドライバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニットストラトス〜青空に向かって歩け〜

【Nコード】

N1770V

【作者名】

八角ドライバー

【あらすじ】

神様のミスで死んでしまった青年はIS世界に転生する事になった！

しかしまた神様のミスで………

これは私の処女作となります。

意見、苦情、アドバイスガンガンお待ちしております。

episode ちょ、踏むのやめてもらえます？(前書き)

どうも、八角ドライバーです。

勢いで書きました。

ストックがあるうちは定期的に投稿しますが……
なんでもないですごめんなさい。

あらすじにも書きましたが、処女作ですので意見、苦情、アドバイ
スガンガンください。

それではどうぞ。

episode ちよ、踏むのやめてもらえます？

「単刀直入に言おう。転生させてあげる！だから踏まないで、ね？
ね？」

男は自分を踏みつけている青年に向かってこう言った。

「へー、まあ勝手に人殺したんだしそれぐらいで許してやるかな」

青年はそう言いながらも足を退けない。

どうやらこの青年は今踏まれている人物……神様らしい男にミスで殺されたらしい。
神が謝罪として

- ・好きな世界に転生
- ・俗に言うチートを5つ付ける

で手を打とうとしているらしいのだ。

青年は少し悩んで自分が踏んでいる人物にこう言った。

「転生先はインフィニットストラトスという世界。チート1つ目は専用機。これはスーパーロボット大戦Lのオリジナル機体。ラッシュバードとストレイバードにして欲しい。これはチート2つ分でも構わない。3つ目は装甲、VPS装甲にして欲しい。4つ目は……」

これは頼みなんだが、主人公の織村一夏とは中1からの友達（別の中学）にしてほしい。あと1つは……いい。」

こうして、転生先も決まり……神の力によって転生していったのだが……

「やべ……ミスったばいな……まあいいや俺しーらね」

どうやら神がミスをしたようで……

青年は無事なのだろうか……

青年の物語が始まろうとしている……

episode ちよ、踏むのやめてもらえます？。(後書き)

神「なあなあ」

なんですか？

神「俺扱いひどくね？」

気のせいですよ。ただ斬新かもしれないですね。

神「それがひどいんだよ……」

次は主人公がIS世界に降り立った話です！

神「スルー？スルーなの？スルーしたんだね？」

ではお楽しみに！

神「ねえ！？スルーなの？神様ってこんな扱いなのおおおおおお
おおお！？

episode 1 なんか身体おかしくね？(前書き)

どもっ！八角ドライバーです。

早速続き書きました！

ではどうぞ。

episode 1 なんか身体おかしくね？

さあーて無事に転生したはいいが……

その青年だった人物は大きく息を吸って……………

「なんで女になってるんだよおおおおおおおおおおお！
！！」

「お、おい大丈夫か？晴夏」

晴夏と呼ばれている彼女はげっそりしていた。

高校生平均男子より若干高い背。
かなり大きい胸。
腰まである黒い髪、整った顔、透き通った綺麗な声。

どこからどう見ても女そのものであった。
しかもかなりのスペックらしく10分歩いてるだけで実に何人もの
男にナンパされていた。

友達に見つからなければおそらく拉致られていただろう。
いや、拉致られていた。

「お前いつも有名人並に変装してるのになんでそんな格好で外歩い

「てたんだ？」

首を傾げながら晴夏に聞いてくる少年、織斑一夏はそう言った。

「え？あ、ああ！今日はイケるかなー？と思ったんだよねー、あはは、あはは……」

どうやら記憶がない間はそうゆう事になっているらしい。
テキストに相槌をうちながら自分の事について不信がられないように聞いた所以下の事がわかった。

名前は内海晴夏うしみはるか

両親がおらずとあるナンパ野郎から逃げ回っていた所を彼の姉の織村千冬に助けられ、家がお隣同士と判明。ほとんど家族と言ってもいい仲らしい。(ちなみ中学は違うらしい。)

ちなみに今日は、一夏がISを動かせると判明してしまい、色々あって帰っている最中に晴夏を見つけたとの事らしい。

「て事は織斑、やっぱりIS学園に行く事になるんじゃないか……」

「おそらくそうなるだろうな、というか晴夏。なんで突然苗字呼びなんだ？今まで通り名前でもいいじゃないか。」

「え！？あ、うん、ごめんね！なんでもないよ！」

「熱でもあんのか？どうする？今日家来るか？」

「うーんどうしょ」「ドカーン！！！！」「え！？」

突然空から黒い物体が複数降ってきた。

どうやらこれがISというものらしい。

黒いISは銃口を一夏に向けてきた。

「俺を狙っている！？晴夏逃げるぞ！！」

「え！？うん！！」

しかし生身とISの鬼ごっこなど結果は既に見えており……
あっという間に二人は囲まれてしまった。

「くそっ……晴夏！お前は逃げる！こいつらは俺が狙いらしいから
な……」

「え、でも……」「いいから早く！」「う、うん……」

晴夏は駆け出した。

狙いは一夏のみらしく、囲みはすぐに抜けられた。

しかし、それを待っていたのか黒いISは一夏を撃とうと更に構える……

それを瞬時に把握した晴夏は一夏の元へ戻ろうと駆け出す。

「晴夏！？なんで戻ってきた！」

「こいつら一夏以外は襲わないようになってるみたい！私がいた方がいいわ！」

しかし、状況は変わらない。

黒いISはいつ晴夏ごと一夏を撃つかわからないのだ。

二人が焦っていると晴夏はある事に気づいた。

首にかかった黒い翼と青い翼のネックレスだ。

不思議とこれがISだとわかった晴夏は迷わず自分のISを呼んだ。

「来て！ラツシュバード！」

晴夏が光に包まれたかと思うとそこに立っていたのは

全身を白を基準とし、金、青のカラーリングの全身装甲の、それはまるで鳥の様なISだった。

突然の事態に驚いたのか、黒いISはラツシュバードに発砲してき

た。

しかしラッシュバードの装甲には傷一つ付かない。

「武器は……ライトニングフィスト？よし、これで！」

ラッシュバードが高く飛び上がり一機のISに急降下しながら殴りかかる。

油断していたのか、装甲の強度に驚いていたのか

それを黒いISに直撃させると更に持ち上げて全力のボディブローを浴びせた。

絶対防御を貫通したらしく、そのISは強制解除され、仲間の一機に回収されて逃げていった。

残りは二機。

接近戦は不利と理解したのか距離をとりマシンガンを浴びせてくる。いくらラッシュバードにダメージがないとはいえ、衝撃は相殺できない。

「くっ………だったら！」

晴夏は防御しながら照準を合わせ、ラッシュバードの頭部からビームを放った。

ビームによりマシンガンを相殺し、一機のISにそのままビームを当て続けた。

両手両足を破壊され戦闘続行不可能となった一機はもう一機に回収された。

こうして、黒いISを全機退けた晴夏だったがここである事に気がつく。

「そっだ一夏は!？」

無我夢中で戦っていたため、一夏の事を忘れていたのだった。

ISを解除し、一夏の名を呼ぶ。

「いちかああ!いいいちかあああああ!!!」

「内海、そんな大声出さんでも一夏は無事だ。」

声ができる方を見るとそこにはISを装備した1人の女性がいた。右傍に一夏を抱えて。

「えっと…あなたは……?」

「おいおい、それはなんのポケだ?わかっているだろ?私だ、織斑千冬だ。」

織斑千冬と名乗る女性は一夏を降ろし、ISを付けたまま晴夏に近づいてきた。

「内海、私と一緒にきてもらおう。」

「ち、千冬姉!？」

おそらくラッシュボードの事だろう。

と、晴夏は思った。

所属不明のISを所属不明のISが撃退したのだ。

残った方だけでも調査されるに違いない。

「わかりました。千冬さん。」

この人には逆らわない方がいい。

と、直感で気づいた晴夏は大人しく従う事にしたのだった。

episode 1 なんか身体おかしくね？（後書き）

神「よっ！」

なんですかそのノリは……

神「いや俺スゴくね？あんなスペック高い娘作るわ出鱈目な性能のIS作るわ……」

ISは後者はともかく前者はミスでしょうが。

神「うっ……」

まったく……

神「つかさつかさ、なんで晴夏は転生したてで女言葉マスターしてんの？」

えっと……それは……その……転生した時にそーゆうチートがデフォルメで付いてたって事で……ダメ？

神「それと、あれじゃ転生じゃなくて憑依に近くね？」

……

神「あらら、しよげちゃった……じゃあここは俺が締めるしかないな。」

神「次回もお楽しみに！」

episode2 カツ井って自白剤でも入ってんのかな？(前書き)

どもっ！八角ドライバーです。

IS学園入学の所まで一気に更新しようと思いました。

思いつきで行動して何が悪い。

今回はsideを入れて見ました。

気に入ったら使い続けます。

ではではござ。

episode 2 カツ井って自白剤でも入ってるのかな？

晴夏side

「腹減つたろう。ほら食べ。」

千冬さんがそう言い、
出してきた物はカツ井。

(カツ井って取調室の必需品なのかな？)

「カツ井は私のおごりだ、愚弟を助けてくれたお礼と思ってくれ。
それとここは取調室じゃない。」

んなっ!?

この人読心術でも持ってんの!?

「は、はあ……ではいただきます。」

「食べながらで良いから聴け。肯定なら縦に、否定なら横に首を振
れ。わかったか？」

コクコク

「よし、ではいくぞ。あのISはどこで手に入れた」

.....

これはどうしようもない。

どっちに振ればいいんだろ？

「答えにくいか、なら知らないなら横に振れ。」

ブンブン

「そうか……では次だ。お前はあの戦闘が初めての操縦だったのか？」

コクコク

「あのISの存在はその時に知ったのか？」

コクコク

「では黒いISの事についてわかった事はあるか？」

私は丁度食べ終わった……と言うかもう食べきれなかったので答える事にした。

「あのISは一夏のみを狙っている様でした。黒いISに囲まれた時、一夏に言われて私だけ逃げようとした時、何もされませんでしたから。私が包囲を突破したら一夏を撃とうとしていたので間違いはないかと……」

「なるほど……おそろくは……」一夏がISを起動させたから？」「ん？内海、誰から聞いた」

「本人からです。」

「あのアホが……………」

あらら……………一夏、君半殺し確定みたいだね……………

「織斑先生！あのISの解析が終わりました！」

そう言って入ってきたのは……………中学生？みたいな人だった。でも一部分は群を抜いて大きい。

「内海、彼女は山田真耶これでもIS学園の教師だ」

千冬さん……………これでもって酷いと思うのですが…

そして千冬さん、山田先生の後に続いて私達は部屋を移動した。

side out

モニターのある部屋に向かった晴夏のISの特徴を山田先生に伝えられた

「IS名ラッシュボード。この機体の最大の特徴は左腕に装備され

た「ラプラスウォール」です。これはエネルギー吸収機構として使用できる様で、エネルギー兵器の殆どはこれで無効化出来ます。さらに「ラプラスウォール」で吸収したエネルギーは稼働エネルギーにも回される様で、元々高い継戦能力が更に高まっています。右腕にはエネルギー放出機構が備わっています。左腕は防御、右腕は攻撃用と考えても大丈夫かと思えます。さらに装甲はVPS装甲ヴァリアブルフェイズソフトというものでコーティングされており、電圧を調整して実弾の無効化が可能となっています。武装数は三つ。頭部から放出される「メーザーアイ」おそらく最低限の反撃様ですが、量産機のシールドエネルギーは直撃しただけで半分は減るでしょう。次に「ライトニングフイスト」右腕にエネルギーフィールドを展開し、打撃戦をするというシンプルな物ですが、威力は絶大です。直撃すれば防御特化機だろうと稼働不能になりますね……最後に「ライトブレイザー」右腕の放出機構からエネルギーを飛ばすのですが……普通こんなエネルギー量を放出したら機体が持たないはずですよ。」

晴夏は山田の説明を聞いて驚きを隠せなかった。

ラッシュバードは強いとわかっていたがここまでとは正直予想外の事だったのだ。

「なるほどな……機体性能、武装、共に化け物スペックと言っわけか……」

「はい……後、解析してわかったのですがラッシュバード以外にも機体が呼び出せるみたいで……」

「バカな！一つのコアに二機のISが登録されているとでも言うのか！？」

「は、はい……それとラッシュバードにはISコアとは別のコアが備わっているらしく……」

「なんだと！？ISコア以外のコア！？」

千冬もこれには驚きを隠せなかった。

「ああえつと……厳密に言うとは違つのですが……この機体にはISコアは付いてはいるんですがISコアからはシールドの為にしか使われていないんです。他の動力はこのDコアという物から使われています。」

「化け物スペックで更に謎の多い機体、か……内海、これはしばらく預かるがそれでも大丈夫か？」

「大丈夫です。まったく問題ありません。」

「そうか、では今日はもう帰れ。あいつが心配しているだろう。山田先生、内海を頼む。私はやる事が出来た。」

山田に車に乗せられ（かなり危なっかしい運転だった）、家まで送ってもらつと家の前には一夏が立っていた。

「晴夏！よかった、心配したんだぜ？飯できてるから家上がってけよ。」

そう言い、一夏は晴夏を家に上げた

「晴夏。」

「ん、何？」

「助けてくれてサンキューな。」

「いやいや！あの時は無我夢中で………それに千冬さん来てくれてなかったら巻き込んでたかも知れないし………」

「でも、助けてくれたのは事実だろ？」

「うん………それじゃどういたしまして………」

「おう！」

後日、晴夏は千冬にE.S学園に通わされる事になった。

episode 2 カツ丼って自白剤でも入ってるのかな？（後書き）

神「よっ！」

いやなんでそんな友達みたいな感じなんですか……

神「親しみやすいだろ？それに俺踏まれてるんだぜ？神なのに」

ちなみに晴夏と一夏をくつつけさせる予定はないです。

神「あ、スルーされた……てかそれマジ？」

オオマジです。

神「だってフラグ立ってたじゃん。」

立ってないです。

神「嘘は良くないなあー？思いつきり立てたよねえー？」 偉そう

晴夏も一夏並の鈍感を持ち合わせています。

単になんか恥ずかしかっただけです。

神「うお、唐変木が2人……」

そろそろgdって来たので……

意見、苦情、アドバイスガンガンお待ちしております！

神「次回もお楽しみに！」

あ、それ言いたかった……

episode 3 炸裂！出席簿ハンマー！（一夏命名）（前書き）

どもっ！八角ドライバーです。

今回は入学後のSHRの自己紹介から始まります。

ではどうぞ。

episode 3 炸裂！出席簿ハンマー！（一夏命名）

side 晴夏

「えーと、内海晴夏です。趣味は……散歩です。（変装するけど…
…）一年間よろしくお願ひします。」

手短に済ませ、私は席に座った。

しかし周りの女子はじつとある方向を見つめたままだ。

その視線の先は……

世界で唯一男でありながらISを動かせる存在、織斑一夏だ。

その一夏はというと……

なにやらソワソワしている。

何処か遠くを見つめていたか思えば窓側を見つめていたりしている。

意識も何処かに飛んでいるらしく山田先生がいくら話しかけてもビクともしない。

あ、山田先生泣きそう。

一夏。いいかげん戻っておいでー。

side out

side 一夏

さつきからすごい視線を感じるんだが……
まるで珍しいものを見ている様な視線だ。
まあ当たり前だよな、俺は世界で唯一の
男性IS操縦者らしいから……

つてか視線すごい本当にすごい。
担任早く来てくれよ……

こんな時は何処かに遠くを見ていると聞いて聞いた事があるぞ。
よし、黒板の隅にある汚れを見つめていよう。

……ダメだ。

拭きたくなる。すげー拭きたくなる。
やっぱり外見るのが一番だよな。

外に顔を向けると1人の女子に目がいった。
長い黒髪、ポニーテール、ややつり上がった目。

(あれって箒か……?)

side out

そんな事を一夏が考えていると、
一夏は自分の前に緑髪の中学生みたいな人がいる事に気づく。

「織斑君? 織斑君!」

「は、はい!?!」

「あ、大声だしちゃってごめんなさい！ お、怒ってる？ 怒ってるかな？ ごめんね！ ごめんね！？ あのその・・・自己紹介、“あ”から始まって、今“お”の織斑君なんだけど、織斑君、自己紹介・・・してくれるかなあ？」

「は、はい。織斑一夏です、よろしくお願いします・・・」

簡単な自己紹介、当然だがそれで周りの女子達が納得する筈も無く、不満気な空気が出来る。

「えっと・・・以上です！」

ガタンっという音と共にクラスの大半が椅子から転げ落ちた。何を言うのか期待してみれば、何も言わずに自己紹介を終わらせてしまったのだから、当然の反応と言えればそれまでなのだが・・・。だが、それに納得しなかった者が一人、一夏の後ろに立って、手に持った出席簿で彼の後頭部を思いっきり殴る女性がいた。

「つてえ！？ つて、げえ！？ 関羽！？」

一夏がそう言った時、再び彼の後頭部に出席簿が叩き込まれた。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

痛みに身悶えている一夏を放置して、その女性は教壇、山田先生の横に立つ。

「織斑先生、会議は終わられたのですか？」

「ああ、山田先生、クラスへの挨拶を押し付けて申し訳ございませんん」

「いえ、副担任としてこれくらいはしないと」

「……………で？お前は挨拶も満足に出来んのか？」

「いや、千冬姉、俺は……っ」

再び出席簿ハンマー（一夏命名）が一夏の頭に落ちた。

「織斑先生と呼べ、馬鹿者」

「……はい、織斑先生」

一夏が千冬の弟だという事でクラスが再び騒がしくなったものの、千冬が出席簿を教卓に叩きつける事で沈静化、自己紹介が進み、なんとか無事に終わることが出来たのだった。

episode 3 炸裂！出席簿ハンマー！（一夏命名）（後書き）

神「よっ！」

ああ…もうそれで通す気ですね……

神「親近感湧くだろ？ってこれ前話でも似たような事言ったな……」

さてさて、IS学園に入学しましたね！

神「一夏、今すぐ俺と変われ」

そんな無茶苦茶言わない！

一夏「まったくだ。あの辛さを知らないからそんな事言えるんだぞ
！」

神&作「！？」

一夏「この作品の意見、苦情、アドバイス、感想ガンガンお待ちし
ております！それではまた次回に！」

あ、またその役奪われた……

episode 4 セシ……セシ……（前書き）

どもっ！八角ドライバーです。

絶賛合宿なう。

皆制服の中私だけ私服なう。

もうやだ死にたい。

それと今回はセシリアの扱いがヒドイです。

オルコツ党の方はバックオススメします。

ではではござ。

episode 4 セシ……セシ……

IS学園入学後、最初の授業は山田先生によるISの基礎知識になった。

ISに関して、女子は殆どが大なり小なり勉強はしているだろうが、これはその復習も兼ねた授業なので大事な事だ。

「はい、ここまでで何か質問はありますか？」

凡その基礎知識となる所を進行していた山田先生が質問はあるかと振り返った。

そして、数多くいる生徒達の中から小さく手を上げている生徒を見つける。その生徒とはIS学園初の男子で、史上初の最初の男性IS操縦者となった織斑一夏だ。

「はい、織斑くん？ 何でしょうか？」

「えっと……そ、その……」

「はい？」

「殆ど、全く解りません……」

「……え？」

一瞬、山田先生は一夏が何を言っているのか理解出来なかった。

確かに一夏は男子で、今までISに触れる機会なんて無かったのだから、理解出来ない所が多少あっても可笑しくはなかったのだが、基本的にIS学園に入学する者には入学前にISの基礎知識が書かれた参考資料が配布されている。

配布資料を読んでいれば少なくとも基礎知識の中の、それこそ基礎の基礎くらいは解る筈なのに、それが解らないとは……如何回事なのか。

「ま、全く!? これっぽっちもですか!？」

「はい、全く、これっぽっちも……」

「織斑」

山田先生では荷が重いと思ったのか、教室の後ろで授業を見ていた千冬が一夏に声を掛けた。その口調と表情は心なし厳しい。

「入学前に配布された参考資料は読んだか？」

「え? 参考資料つてあれだろ? あの分厚いやつ……あれなら読まずに間違えて少年サンデーと一緒に捨てちゃった」

その瞬間、主席簿ハンマーが一夏の頭に炸裂し、本当に出席簿で頭を叩いた音なのだろうかと思うほど激しい音が教室に響き渡った。

「馬鹿者、表紙に必読と書かれてあっただろうが! 後で再発行してもらってから、一週間以内に覚えろ、いいな?」

「い、いや……一週間であの厚さはちょっと……」

「……やれと言っている」

「……はい、やります」

千冬の鋭い眼光が一夏を射抜き、逆らう事は許さないと言葉に出さずとも語っていた。一夏は退路を断たれたのか、項垂れながら了解の言葉を返すしかない。

第と晴夏は呆れて溜息を付き、他の女子生徒はクスクスと笑っていた。

授業が終わって休み時間になり、箒と晴夏は頭を抱えて唸っている一夏に近づいた。

ちなみにこの2人、面識は全くなかったがSHR後の休み時間で一夏から晴夏を紹介され、恋ライバルではないとわかった箒は晴夏と仲良くなったのだった。

「一夏……貴方って本当にバカね……」
「グフツ……！」

「サンデーと一緒に捨てるなど……バカを超えている」
「ザクツ……！」

「「どうしようもないわ(ぞ)」」
「ドムツ……！」

「ちょっとよろしくて？」

「ん？」
「む？」

「……………」
流れる様な三段攻撃が一夏に決まり、一夏を瀕死寸前まで追いやった所に割り込んでくる者がいた。

話しかけてきたのは金髪の長い髪の少女、見た感じだとヨーロッパ系の人間だろうか。

「まあ！？ 何ですのそのお返事！ 私に話しかけられるだけでも光栄なのでから、それ相応態度があるのではないかしら？」

「悪いな、今の俺は心身共にブロウクン状態だ。それに誰だお前？」

「一夏……自己紹介聞いておきなよ……イギリスから来たセシリア・オルモットさんだよ。」

「あー、そういえばそんな人いた気がするな……んで？そのモルモットさんが俺に何の用ですか？」

「モルモットじゃありません！セシリア・オルコットですわ！全く……代表候補生にして入試主席のこの私を知らないのですか！？」

「おう、悪かったなオルゴール。そんで代表候補生ってなんだ？」

「ですからセシリア・オルコット！オルゴールではなくオルコットですわ！」

「一夏、代表候補生とは国家代表IS操縦者の候補生、読んで字の如くだ。これぐらい男でも知っておる。覚えておけ。」

「ふうん、何か凄いのか？ それ」

「そうですね、代表候補生は簡単には選ばれないものですわ。人数に限りがありますし、IS適正レベル、教養、技術、それぞれが優れていなければ代表候補生になれないのです。更に代表候補生には国家や企業から専用機……つまり専用のISが支給されているのですわ」

「そう！ つまりはエリートですわ！！」

「へえ、エリートねえ……」

「そうですね！ 私のような選ばれたエリートと同じクラスになれるのは正に奇跡！ その幸運をもう少し喜んでいただけませんか？」

「そうか……それは光栄だ」

「うん、光栄だね」

「光荣だな」

「……………馬鹿にしていますの？」

棒読みそのものと言っていい贅辞にセシリアは不機嫌と言わんばかりの表情で一夏を睨みつけた。

（ああ、なるほど……女尊男卑の影響って事ね……）

晴夏は転生したてだったのでそんな事をしたりはしなかったしというかなんパしてる人達って勇者だったのね…と思っていた。

「だいたい、何も知らないくせによくこの学園に入学してこれましたわね。男性初のIS操縦者と言うから少しは期待していたのに、織斑さんは期待外れですわ」

明らかに一夏を馬鹿にしていた。口にはしていないが晴夏と箒の事も馬鹿にしているのが態度に出ている。おそらくは専用機持ちはこちらの男は勿論、女性より格上と思っているのだろう。

「まあでも、私は優秀ですから、織斑さんの様な方にも優しくしますわよ？ 解らない事があればまあ、泣いて頼まれれば教えて差し上げて宜しくってよ？ 何せ私、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「あれ？ 俺も倒したぞ教官」

「私も倒したよ、判定勝ちだけ」

実際は晴夏は完勝しているのだが、話がややこしくなると判断したため判定勝ちと言ったのだ。

「はあ!？」

「倒したってどうか・・・いきなり突っ込んできたのをかわしたら、壁にぶつかって動かなくなっただけだ」

「初撃で致命傷与えて逃げ回ってだから勝ちとは言いがらいのかな?」

「私だけと聞きましたが・・・っ」

「間違っただ情報なんじゃないのか？」

おそらく、というか絶対そうだろう。

「あなた方も教官を倒したと言うのですか!？」

「え、えーと、落ち着けよアルフォート」

だからオルコットですわ!だれがブルボン販売のチョコレート(103円)ですか!！」

「おお、イギリスでもアルフォートは人気なのか？」

ここでチャイムが鳴った。

休み時間が終わり、授業が始まる。

モタモタしていると織村先生の出席簿ハンマーをいただく事になる。

「話の続きはまた改めて! 宜しいですわね!？」

そう指差しながら宣言して急いで自分の席に戻ったセシリアの後姿を眺めながら、晴夏と篤は一夏に自分達も席に戻ると伝え、席に戻っていった。

episode 4 セシ……セシ……（後書き）

神「よっ！」

はいども。

神「お、もう始めの挨拶は諦めたか？」

ええ、諦めましたよ。

神「出てきたな、セシリア。扱いが俺より酷くてホツとしたよ。つてかアルフォート美味しいよな。」

ええ、アルフォートは美味しいです。あれで奇跡の103円ですからね。

というかそんな事言つとオルコツ党の人達が……

神「え？つわあああああああああああ！！！！！！」

ほらいわんこつぢゃない……

よし、邪魔者は消えた後は……

この小説の意見、苦情、アドバイス、感想をガンガンお待ちしております！

晴夏「それではまた次回に！」

今度はお前か……orz

episode 完全にとばっちりだぁ……………（前書き）

どもっ！八角ドライバーです。

今回はIS二次創作恒例の一夏とオリ主に
喧嘩売るセシリアの話ですよ。

どんな時でも更新できる……………

「あいふおん」素晴らしい……………

ではではござ。

episode 5 完全にとぼっちりだぁ……………

「これより、再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める！
クラス代表者とは、対抗戦だけでなく、生徒会の会議や委員会の
出席などの、まあ学級委員長的な役割と考えて良い。自薦他薦問わ
ない、誰かいらないか？」

明らかに面倒な仕事だ。

クラス代表対抗戦に出られるのは実戦経験を積めるという意味で魅
力を感じるが、生徒会の会議や委員会の出席は流石に誰もが遠慮し
てしまう。こんなの受けるのはよほどのいい子ちゃんだけだろう。

「はい！ 織斑くんを推薦します！」

「あ、私も私も！」

「お、俺！？」

驚いて一夏が勢いよく立ちあがった。

「織斑、席に着け、邪魔だ。さて、他にいないのか？いないならこ
のまま織斑で決めるぞ」

「い、いや、ちよつと……………」

「納得がいきませんわー！！」

突然叫び、立ち上がったのはセシリアだった。

「そのような選出は認められません！ 男がクラス代表なんていい
恥さらしですわ！ このセシリア・オルコットにそのような屈辱を
一年間味わえと仰るのですか！？」

セシリアが見下す存在が自分の所属するクラスの代表になるなど、セシリアのプライドが許さなかった。

その視線は一夏をしっかりと捉えており、鋭く睨みつけている。

「そもそも！ 文化としても後進的な国で暮らさないといけないこと事態、私には耐え難い苦痛で・・・っ！！」

「イギリスだつて大したお国自慢無いだろう。食事の不味い国NO.1を何年連続で更新してるんだ？それに電車の到着時刻なんか平気で遅れるらしいじゃないか」

「っ！ あなた、私の祖国を侮辱しますの！？」

イギリスを侮辱されたと思ったのか、先ほどよりも更に鋭い眼光で一夏を睨みつけるセシリア。

「先に侮辱して来たのはそっちだろうが！」

負けじと一夏も反論する。

「男が私に反論するなど許すまじ行為ですわ！決闘です！」

「それでクラス代表を決めるってわけか。いいぜ！やってやるーじやねーか！..！」

「それとそこのあなた！」

セシリアがそう言って指を指した先には晴夏がいた。

「え、ええ？私！？」

「判定勝ちとはいえあなたも教官を倒した身、それならどちらが上なのかついでにハッキリさせてあげますわ！」

「ちよ、ちよっと待って。これって仮に私が勝ったらクラス代表になるわけでしょ？私、自薦も他薦もされてないんだけど……」
「なら私がはるん推薦する〜」

そう言って手を上げてぶらんぶらんさせているのは、
通称のほほんさんこと布のほとけほとね仏本音だった。

「ふむ。話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。3人とも準備をしておくように。それと内海は授業後に私の所に来るように。それでは授業を始める」

side 晴夏

千冬さんに私の所に来るようにと呼ばれた私は授業後、すぐに千冬さんの所に向かった。

「来たか内海。おそらくお前もわかっているだろうが話はラッシュバードの事だ。あれはパワーが並ではない。一週間後の決闘ではライトブレイザーの使用を禁ずるがいいな？」

「大丈夫です、全く問題ありません。」

たしかにライトブレイザーは封じておかないといくらISSとはいえ大怪我させてしまう事もあるからな。

「話はそれだけだ、次の授業の準備をしておけ。」

「わかりました。」

そう言って私は次の授業の準備をしにクラスに戻っていった。

side out

episode 完全にとぼっちりだぁ……………（後書き）

神「よっ！」

本当神とは思えない親しみやすさですね……

神「今回終わり方微妙じゃね？」

いい終わらせ方が思いつかなかったんです。

仕方ないでしょ。

神「そこまで偉そうに言われると反論する気も失せてくるな……………」

次はIS二次創作恒例（？）のオリ主VSセシリアです！

神「こいつ今学校行事で家にいないから更新が遅れるかもしれんがなー」

すみません……………出来るだけ早くしてみますので……………

神「この小説の意見、苦情、アドバイス、感想をガンガンお待ちしてるぜ」

第「次回も楽しみにしておくのだな」

あ、もう私はそれ言えないんだね……………

episode 6 クラス代表決定戦（前編）（前書き）

どもっ！八角ドライバーです。

活動報告にも書きましたが誤ってepisode 6を削除してしま
い絶望に打ちひしがれてました。

本当にしょーもないミスをしました。

次からはこのような事がないようにします。

晴夏「私、ロックンEXEのデリートされるナビの気持ちかわか
った気がするわ……」

！？

まさか前書きにまで！？

晴夏「ではでは、本編をお楽しみくださいー！」

episode 6 クラス代表決定戦（前編）

side 晴夏

「イマジナリイロード、VPS装甲、共に問題ありませんっと……」

私は決闘に備えて機体の最終チェックを行っていた。
ちなみに私が今日使うのはラッシュユバードではない。

ネットで調べたところオルコットさんの使うIS「ブルーティアーズ」は狙撃戦主体のISで近接格闘型のラッシュユバードとは相性が最悪。それにこれに関しては織斑先生は何も言っていなかったからね

「よし、チェックも終わったし、観客席で一夏とオルコットさんの決闘でも見に行こうかな」

と私がピットから観客席に向かおうとすると目の前の扉が開いて、織斑先生が入って来た。

「内海、決闘の準備をしる。悪いが先にお前とオルコットが決闘を行う事になった。」

「は、はいい!？」

side out

side 一夏

俺の専用機「白式」がついさつき届いた。
ついさつきってのがどの位かというと

決闘開始まであと15分つてくらいついさつきだ。

俺の専用機「白式」はまだ完全に俺の専用機に
なったわけではないらしい。

俺が1番動かしやすいように初期化ふあーまっどと最適処理化ふいつていんぐをして初めて俺専用機となるらしい。

しかし決闘まで残り10分もない。

そこで俺達の後で決闘を行う予定だった晴夏を先に戦わせ、その間にそれを済ませてしまおうということになったんだと。

「晴夏……………あんな奴に負けるなよ……………」

そう呟き俺は初期化と最適処理化を始めた。

side out

「はあ……………つまり時間稼ぎをしろ、と？」

説明を聞いた晴夏は織斑先生にそう聞いた。

「まあ、そういう事だと思ってくれていい。わかったなら早く出る。相手をあまり待たせるな」

「了解です。それじゃあ行こう、ストレイバード。」

晴夏はもう一つのISを呼び出した。

晴夏が光に包まれたかと思うとそこに立っているのはラッシュユバードと比べるとスマートでそして吸い込まれるような漆黒の鳥だった。

「それが内海のもう一つの機体か」

「はい、ストレイバードと言います。データはこの後でお渡しします。」

「わかった。よし内海、天狗になっている小娘の鼻をへし折ってこい」

「!!、了解です。ストレイバード、行きます!!」

ストレイバードはアリーナへと向かっていった。

sideセシリア

.....遅い。

遅い遅い遅い。

遅過ぎますわ！一体私がここで待ってからどれ程時間が経ったのでしよう！！

日本人は時間に正確だと聞いてましたが改める必要がありますわね！！

「織斑さん！早く来たらいかなんですの！？それともこの私が恐
k「そんなに大声出さなくてももういるよ」！？」

私の前にはいつのまにか全身装甲の黒い、まるで鳥のようなISが
いました。

しかもこの声……織斑さんではありませんわね……………

「もしかしてあなた内海さんですの！？」

「もしかしても何も……………私以外あり得ないよ。」

「しかもそのようなIS見た事ありませんわ！それに織斑さんはど
うしたんですの！？」

「それは仕方がないよ。だってこれ初めて使うもの。それと一夏はつ
いさつき専用機が届いたから初期化と最適処理化の為に私が先に戦
う事になったの。これで納得した？」

「……………まあ何だろうと私の勝利する事に違いはありませんわ！さ
あ踊りなさい！このセシリア？オルコットと「ブルーティアーズ」
の奏でる円舞曲ワルツでっ！！」

episode 6 クラス代表決定戦（前編）（後書き）

神「よっ！」

……はあ。

神「おいおいどうした？そんなにミスったのが堪えたか？」

ええ、まあ……

神「まあお前は失敗をいつまでも気にし過ぎるからな。さっぱり忘れる。」

はい……

神「次回は晴夏VSセシリアだぜ！」

一夏「この小説の意見、苦情、アドバイス、感想をガンガン待つてるぜ！」

千冬「次回も楽しみにしている。」

episode 7 クラス代表決定戦（中編）（前書き）

どもっ！八角ドライバーです。

なんというか……

すみませんでしたあああああああ！！！！（ダイナミック土下座）

この話のみ以下の項目が取り上げられます。

？暴力的

？拷問

？オルコツ党発狂（悪い意味で

流石にやりすぎたと思っているので気分を悪くされないようご注意ください
願います

ちなみに私はどの党にも属しておりません。
出来るだけ公平に進めたいので……

では前書きはこの位にして…

（キョロキョロ……）

ではd 晴夏」ではでは、本編をお楽しみください！」

……………（ノ、ノ）

episode 7 クラス代表決定戦（中編）

試合開始と同時にセシリアのスターライトMk-?が火を吹く。

それはセシリアを含め観客全員が直撃「した」と思い込んでいた。

しかしストレイバードはその場から「消えていた」
いや「消えていた」よりも

その場から「消失した」

の方が表現は合っているだろう。

突然の出来事に驚きを隠せないセシリア。

ハイパーセンサーを使って探してはみたがそれらしき反応は探知されない。

まるで目の前で神隠しが起きたかのように消えていたのだ。

「内海さん！？隠れてないで出てきたらいかげんですの!？」

しかし答えは返ってこない。

これでは勝負にならない、それに事故が起きているのかもしれない。と思ったセシリアは山田先生に試合中止を申し出ようとした

がその時、

「試合中に警戒を解くなんて自殺行為だよ？」

とセシリアが聞いた瞬間

突如ブルーティアーズの背後に現れたストレイバードがワイヤーを使いブルーティアーズを捕縛する。

「内海さん！これは卑怯ではなくって！？」

「ISは兵器運用されているんだよ？やがては私達も戦争に出る事になるかもしれない。その時に貴方は相手の策略を卑怯の一言で片付けられると思ってるの？」

「それは……………」

「それにISを開発したのはオルコットさんが馬鹿にした日本人。その人がいなければ今でも男尊女卑の時代だったかもしれない。そんな時でもオルコットさんは男を馬鹿に出来る？出来ないでしょ？今のオルコットさんは虎の威を借る狐なんだよ。ってことわざはわからないかな？」

「……………」

「じゃあお仕置きの間だね。安心してね？機体損傷は全く無いから」

「や、やめ、あああああああああああああああああああ！
?!?!?!」

突如セシリアの身体を激しい電流が襲う

ストレイバードがワイヤー越しに特殊高圧電流を流し込んでいるのだ。

ISなら高圧電流ぐらいではビクともしないが晴夏のISは単機で

大群を相手にする為の機体（と設定されているし、機体の特性上それが一番の運用法だったりする）なので威力が桁違いなのだ。ちなみに生身で食らったら一秒も満たずに殺害出来るだろう。

しかしISの操縦者保護機能が気絶を抑え込む

これは軽いというか拷問といった方がいいかもしれない。

そしてあっという間にブルーティアーズのシールドエネルギーを0にする。

《勝者、内海晴夏》

専用機持ちとはいえ無名の選手が代表候補生に勝つたのだ。

観客は凄いと思う人もいたが殆どの人は恐怖を覚えただろう。下手すればISがトラウマになるかもしれない程の。

試合が終わって気が抜けたのかセシリアのISは解除されそのまま自由落下してゆく。

「やばい！やりすぎた!？」

急いで落ちてゆくセシリアを回収し保健室へと直行した。

episode7 クラス代表決定戦(中編)(後書き)

神「＼(^o^)/」

なんですかいきなり、ていうか小説で絵文字は控えてください。

神「何言ってるんだお前。自分だって前書きで使ってるじゃねえか。」

.....(、、:)

神「そんな事より、晴夏ちゃん今回怖いな。てか戦闘の時は雰囲気が変わってるけど今回は俺でも恐怖を感じたぞ」

元々晴夏は大事な場面でスイッチが入るタイプなんです。

+でセシリアの態度でキレてしまったんです。

神「なるほどー。怒らせると怖いタイプ+こ 亀の本 の性格を極限に緩くした的な感じだな」

そんな感じとってくれて構いません。

今回はセシリアが意識不明なので一夏vs晴夏となります。

神「この小説の意見、苦情、アドバイス、感想をガンガン送ってくれ!どうせこんな奴だ!遠慮せずにバーっと言っちゃまえ!!」

一? 第「それでは次回もお楽しみに!」

もうそれに未練なんかないんだからねっ!

.....
グスン

episode クラス代表決定戦（後編）（前書き）

どもっ！八角ドライバーです。

PV5000ユニーク1000突破ありがとうございます！
まだまだ少ないですけどとっても嬉しいです！

今回は一夏vs晴夏の話です！

ではでは、ごきげん。

episode 8 クラス代表決定戦（後編）

「馬鹿者がっ！」

織斑先生の主席簿ハンマー（晴夏命名）が晴夏の頭に直撃した。

「へし折ってこいと言ったが誰があそこまでやれと言った！ISSの絶対防御があるとはいえ今後オルコットの生活に支障が出た場合どうするつもりだったのだ！それと規定に操縦者「にのみ」ダメージを与えるのは反則と記述されている！先程勝ち判定が出たが貴様は反則負けだ！！」

「……………すみませんでした」

「私に謝ってどうする！この試合の後にオルコットが意識を取り戻したという連絡があり次第直ちに謝ってこい！！」

「いいか内海、お前が今使っているのは「兵器」としてのISSではなく「スポーツ」としてのISSだ。確かにやがては兵器運用されるだろう。しかしその時にはまた教師が教える事になる。今は「兵器」を捨てて「スポーツ」に専念しろ、わかったな。」

「……………わかりました。」

すると千冬はフッと笑い

「それでいい、よしでは行ってこい。あまり織斑を待たせるな」

「了解です！行こう、ラッシュボード！」

そして晴夏はアリーナへ飛び出して行った。

「あれ？さっきの黒い奴じゃなくてあの時の奴なのか？」

「うん、模擬戦とはいえ戦闘だからね。今のうちに両機の特性を理解しておきたいんだ。それに反則負けはこりこりだしね……」

最後の辺りを小さく呟く晴夏。以外と負けず嫌いなのだ。

「なるほど、じゃあ上がってこいよ。もうすぐ始まるぞ？」

「ああ、いや、あのさ地上で戦わない？そっちの方が一夏もやりやすいでしょ？」

「んん？いいけどなんでだ？」

「その…ラッシュバードは……飛行が出来ないんだ…。」

「はあああ！？」

お互い接近戦仕様だし条件は飲んでくるはず……と思った晴夏だったがそれは予想外の答えで返された。

「いや、だったらこの状態で始めるぞ、さっきお前が言っていた事を考えるとわざわざ相手に合わせる事もない、そうだろ？」

「……そうだねじゃあ始めようか」

「おう！勝つても負けても恨みっこなしだ！」

試合開始の合図が鳴ったと同時に白式が手に持った近接ブレードが変形しエネルギーの刃が現れ、切りつけてくる。

「エネルギー刃？だったら！」

即座にラプラスウォールを展開する晴夏。
しかしその判断は間違っていた。

ラプラスウォールが斬り裂かれシールドエネルギーが大幅に削られる。

「嘘っ！？なんで!?!」

これは白式の単一仕様能力「ワンオフアビリティ零落白夜」が原因だ。

自分のシールドエネルギーを使って近接ブレード「雪片式型」を變形させ、エネルギー刃を発生させて切りつけるといふ単純な物だが、シールドバリアーを貫通する効果を持ち合わせており、ラプラスウォールも例外ではなかった。

「油断するな、って言ったのは晴夏だぜ?」

「くっ……」

白式が雪片式型でもう一度ラッシュバードを斬る。

《勝者、織斑一夏》

こうしてクラス代表決定戦は終了した。

episode クラス代表決定戦（後編）（後書き）

一夏「よっ!」

こんにちは。

一夏「あれ？あの人は？」

今日は一夏の勝ちだから一夏だけ呼んだのさ！

一夏「お！そーなのか！なんか嬉しいぞ！」

さてさて、どうしてあんなすぐに勝負に出たのかな？

一夏「元々開始直後に零落白夜使うつもりだったんだよ。でも晴夏強いからさ、不安もあったわけだ。でも、ラッシュボードだけ？あれが飛べないとわかったから勝利を確信してた。」

なるほど……一気に終わらせる予定だったんですね？

一夏「ああ。その通りだ」

よし、では裏話はこの辺にして残り頼むよ！

一夏「展開早いな！？てかいいのか？お前これすげーやりたがってるじゃん」

今回は勝者に譲るのさ！機嫌もいーからねっ！

「夏「そんじゃ遠慮なく……この小説の意見、苦情、アドバイス、感想をガンガン待ってるぜ！次回は意識不明中のエスコートの話だ！それじゃ次回もお楽しみに！」

残念！オルコットなんだなあ！

episode 8 another 意識の中で(前書き)

どもっ！八角ドライバーです。

今回は意識不明ちうのセシリアの話です。

外伝……なのかな？

ではでは、どうぞ！

「夏」……………チッ」

セシリアは真つ黒い闇の中にいた。

(私は……死んでしまいましたの？)

と、考えているとあの女子が目の前に現れる。

あの、強い意志の宿った瞳の女子が。

それは、不意にセシリアの父親を逆連想させた。

(父は、母の顔色ばかりうかがう人だった……)

母は名家の令嬢だった。

そんな名家に婿入りした父は母には多くの引け目を感じていたのだろう。

小さい頃からそんな父親を見て、セシリアは『将来は情けない男とは結婚しない』と心に抱いていた。

そしてISが発表されて女尊男卑の社会になってから父の態度は益々弱いものになった。母は、どこかそれが鬱陶しそうで、父との会話を拒んでいた。

それに比べて母は強い人だった。

女尊男卑社会以前から女というアドバンテージがありながらいくつもの会社を経営し、成功を収めた人だった。厳しい人だった。けれど、憧れの人だった。

そう、『だった』。両親はもういない。三年前に事故で他界した。

手元には莫大な遺産が残った。それを守るためにあらゆる勉強をした。

その一環で受けたIS適性テストでA+が出た。政府から国籍保持のために様々な好条件が出された。

両親の遺産を守るため、二つ返事でした。第三世代装備ブルー・テイアーズの第一次運用試験者に選抜された。稼働データと戦闘経験値を得るため日本にやってきた。そして出会った……内海晴夏……自分の幼少期、自分の理想の、しかしまた違った強い瞳をした、そして自分の愚かさを気づかせてくれた少女に。

「内海、晴夏……」

その名前を口にしてみる。不思議と、胸が熱くなるのが自分でもわかった。

「……」

熱いのに甘く、切ないのに嬉しい。

なんだろう、この気持ちは。

知りたい。

知りたい。晴夏の事を。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

意識が戻った時にはセシリアはベットに横になっていた。

神「よっ！」

（。。）ラヴィー！！

神「まさかセシリアが百合に目覚めるとはな」

計画通りです。

今回からガールズラブ入れた方がいいですかね？

神「いれておけ。ちなみに今回の話はどの時の話なんだ？」

一夏vs晴夏が終わって一日後……………ですかね。

神「なーんか曖昧な答えだな」

それと今回でセシリアがある能力に目覚めます。

神「死の淵から帰ってくる……………ま、まさか答えを出^{アンサー}s」
ちよ、作品違うー！！

それに死の淵まで行ってない！

まったく……………冗談はこの位にして、と…………

この作品の意見、苦情、アドバイス、感想をガンガンお待ちしております！

神「こいつ豆腐メンタルだけど気にするなよ！変な所で図太いからな！」

………あのさ

神「なんだよ、せつかくチャンス与えたのに、言っちまえばいいじやねえか！」

皆で言わね？

神「それは君らしくないとってもいいアイデアだぞ！（猫型ロボ風味）」

それじゃあ………ほらこっち来て皆！

せーの

皆「次回もお楽しみに！！！」

オリジナル(?) 機体&主人公解説(前書き)

どもっ！八角ドライバーです。

今更ながら解説です。

あ、ちょっと遅いとか言わないで！

やめて空き缶投げないでっ！

ちよっ刃物は反則！！刃物はやめてええええええ！！

晴夏「それでは解説に入りましょう！」

オリジナル(?) 機体&主人公解説

主人公解説。

うつみはるか
内海晴夏

> i 3 2 0 1 2 — 3 7 4 2 <

> i 3 2 0 1 4 — 3 7 4 2 <

4 / 2 6 日生まれの牡牛座

1 6 歳

体重………殺気を感じたので記載は不可

身長 1 7 1 c m

スタイル…かなりいい。

専用IS、ラッシュボード、ストレイボード

ご存知本作の主人公。

転生者である。

しかし神のミスで性転換してしまい、今に至る。

口調は一瞬で慣らしたが雰囲気や態度がたまに男のようで
本人の身長も高い事から一部女子の人気も高い。

普段はおとなしめな性格だが意見ははっきり言うタイプ。

戦闘で口調は同じであれども普段とは予想もつかない荒々しさを発
揮するので

某バイクのハンドルを握ると性格が変わる人を極限まで緩くした感
じと一夏に言われた。

よくナンパ（する男が勇者なのだが）に会うので有名人ばりに変装
して出掛ける。

転生前の記憶は無くなっていたが謎のISが乱入してきた時

箒をかばい意識不明に陥った時に再び神と再会し転生前の記憶を思
い出し、この世界にいるイレギュラーを倒す使命を背負う事になっ
た。

好きな食べ物はロールケーキ、というか甜食べ物全般。最近美味し
いと思ったのはセシリアの激甘サンドイッチ。

嫌いな食べ物は牛乳（！！）

専用IS

ラッシュボード

神様が作ったIS元ネタはスパロボLの主人公機

単機で大群と戦闘する為に作られた（という名目）IS

長期戦用近接戦闘型といえはいいだろうか。

本機の最大の特徴は左腕に装備された「ラプラスウォール」

一言でいえば「とてつもないエネルギー吸収機構」

どの位かというと

スパロボLでは

核ミサイルのエネルギーも吸収する。

使徒のエネルギー光線ですら吸収可能なのである。

今作でもその力は余す事なく発揮される

ちなみに吸収したエネルギーは

そのまま武器に回せたり出力に回したりシールドエネルギーに回して回復……なんて事も出来る

右腕にはエネルギー放出機構が備わっている。

謎のISが乱入してきた時、筭をかばい意識不明に陥った時に再び神と再会し、

その時にラプラスウォールの強度を上げてもらっている。

ヴァリアブルフェイスシフト

装甲はVPS装甲こちらの元ネタはガンダムSEEDDESTINY

Y 通称種死より。

装甲表面に電圧を流し、調整する事で実弾攻撃を無効化させる。

弱点は飛行が出来ない事。

武器説明

レーザーアイ

カメラアイとは別の目の部分から発車するビーム。

威力は高くなくあくまで牽制用

ライティングフィスト

右腕にエネルギーを纏わせて殴る格闘技

威力は高い。

ライトブレイザー

右腕の放出機構から特大のエネルギーを飛ばす技
直撃したら危ないレベル

前述したが吸収したエネルギーを武器に回す事が出来るので
例えメーザーアイでもかなりの威力を発揮できる事もある。

ストレイバード

元ネタはスパロボLのライバル機から

長期戦用高機動射撃型といえはいいだろうか。

本機の特徴は別次元に突入を可能とする「イマジナリロード」
最大継続突入時間は30分。

それ以上は機体が戻ってこれなくなるので注意が必要である。

また突入後は別次元のエネルギーを吸収する事でエネルギーの回復
も可能となる

こちらは武器にエネルギーを回す事は不可能。

装甲は同じくVPS装甲。ヴァリアブルフェイズシフト

本機は更に高度なジャミング機能、ステルス機能を持ち合わせてい
る。

このステルス機能は光学情報以外にも様々な
情報を隠蔽する事が可能であり事実、IS学園でも解析不能だった
のはこのステルス機能のおかげである。

弱点は爆発力に欠ける事

武器説明

クロウマシンガン
右手に持つマシンガン
主に牽制用で威力は低い
質より数

フェザントカッター

唯一の近接武装

腰部の特殊アンカーで身動きを取れなくした後

ISにのみ特殊高圧電流を流し動きを止め、高速機動で敵を切り刻む。

電流は逆に操縦者にもみ流す事も可能だがこれはかなり危険な攻撃である。

また規定により操縦者にもみダメージを与えるのは反則と

されているので普段は使わない。(事実クラス代表決定戦でこれを使用して反則負けになったのでバレないように使おうと晴夏は決心した。)

プラヴァーグレネード

左手に装備したグレネードガンを使用。

イマジナリイロードで分身して一斉射撃を行い、背後から至近距離で撃ち込んでトドメ。

なお、かく乱作戦との事なので、この分身は実体ではなくあくまで目くらましである。

ヴァルチャーカノン

マシンガンとグレネードガンを連結させたビームキャノン

かなりの威力を誇る

この2機にはISコアとは別のDコアという物が存在しており
ISコアはシールドエネルギーにしか使われなく、他は全てDコア
が使われている。

オリジナル(?) 機体&主人公解説(後書き)

こんにちは

今回は解説のみなので私だけです。

ここは話が進んで行き新技が追加され次第ここも追加されます。

ちよくちよく見に来てください。

感想、ご指摘をいただきました！

HAL-HAL様ありがとうございます！

それではいつもの……

この小説の意見、苦情、アドバイス、感想をガンガンお待ちしております。
ります。

それでは本編をお楽しみください。

ではっ！

8 / 26

主人公説明部分追加

ラッシュバード説明部分追加

9 / 28

主人公挿絵2枚追加

スマートフォン版では画像が見切れているので「容量を……」

episode あいつの名前覚えづらいな。セ……（前書き）

どもっ！八角ドライバーです。

なんか調子がいいので書き上げました！

ではでは、どぞ。

episode あいつの名前覚えづらいんだよな。せ……

side 一夏

「では、クラス代表は織斑君に決めました。皆拍手！」

パチパチパチパチパチパチ！

「あ、あはは、俺頑張るぜ！」

あれ？俺始めは嫌がってたような……
そくだよな、俺拒否してたよな……

「ってちよつと待て！なんで俺なんだ！？」

「それくらいもわからんのか、理由は単純だ。オルコットに勝った内海にお前が勝った。それだけだ。」

「いやいやいやいや！俺とコロボツクルが戦ってねえだろ！？晴夏は反則負けになってたしそっちと戦う必要もあるだろ！？？」

「その点については解決しておりますわ！私が辞退したんですの！それとオルコットですわ！もはや原型がありませんわよ！？」

「そ、それじゃあ……（汗）」

「というわけだ。男なら潔く諦める織斑。」

そ、そんな……

篤、助け舟を……

あ！あいつ顔を逸らしゃがった！

くっそお……

「不幸だあああああああああああああ！……！」
「静かにしろ馬鹿者。それとそのセリフは危ういからやめろ」

ガツン！

俺の頭に出席簿ハンマーが振り下ろされ、
こうしてクラス代表を巡る争いは幕を閉じたのだった……
む、無念………

side out (DEAC HOUT?)

午前の授業が終わり昼休みに入った
晴夏はすぐにセシリアの所へ向かう。

「オルコットさん……ちょっといいかな……」

「は、はい！？いいですわよ！」

「ここじゃなんだからとりあえず場所を変えよう」

晴夏はセシリアを連れて屋上へと向かう

セシリアは突然の事に内心慌てふためいている。

(一体私に何の……)

「ごめんなさい！」

晴夏はいきなりそっぴい頭を下げた。

「う、内海さん！？」

「本当にごめん！あそこまでする気はなかったんだけどまさか丸一日意識が戻らないなんて……このまま起きなかつたらどうしようっ

て……本当にやりす……ぎ……て………」

晴夏が目から涙が溢れ出てきている

「内海さん！？私もう怒っていませんし……それに謝るのはこちらの方ですわ！あなたのおかげで気づいた事もありますしむしろ感謝させていただきますわ！だからお泣き止みになって！」

「グスン……本当……に？怒って……グスン……ない………？」

「ええ！怒ってないですわ！ですからお泣き止みになってくださいな！」

「うん……ありがとう………」

「ノノノ……それと、私の事は今度からセシリアで構いませんわ。」

「うん……ありがとう……セシリア……私も……晴夏って……呼んで……？」

「わ、わかりましたわ！晴夏さん（~~~~）この泣き笑顔は反則ですわノノノ）」

「よろしくね………」

晴夏は大分落ち着きを取り戻したようだ。

その後は二人で昼ご飯を一緒に食べるなどをして楽しく時間を過ごしたのだった。

セシリア「とうとう私もここに参加出来るんですわね……（感）

篤「この小説の意見、苦情、アドバイス、感想をガンガン待っているぞー！」

（え？これを読み上げる？わかりました……）

晴夏「次回も見てくれたら、それはとっても嬉しいなって。」

篤・セ・神「アウトー……！」

episode 10 誕生!?!IS学園迷所―夏クレーター! (前書き)

どもっ!八角ドライバーです。

誰かが読んでくれてるって嬉しいですね!

読み専卒業してよかったですね!

ではでは、どぞ。

episode 10 誕生！？IS学園迷所一夏クレーター！

「それでは今日からISの実践訓練を行う！まずは専用機持ちによる見本を見てもらう。織斑、オルコット、内海、前に出て展開しろ。」

「言われたとおり前に出てそれぞれのISを展開する三人。」

晴夏のISラッシュユバードを見た生徒達は

「内海さんのISがすごい……」

「なんだか勇ましくて……でも鳥のようで……」

「なんだかスーパーロボットって感じる……」

など呟き皆見惚れていた。

だがしかし……

隣で一夏が展開に手こずっていた。

「何をやっている織斑、熟練した者なら展開に一秒も掛からんぞ！」

「そうは言っても……いだったっ!？」

「教師に口答えするな、さっさと展開しろ。」

刹那の如く出席簿ハンマーが一夏の頭に炸裂する。

「ええい……ままよ！来い！白式!!」

「お、織斑君!?!だ、ダメですよ!この話とは全く関係ないんです

よ!?!」

すかさず突っ込む山田先生。
そんなやりとりを無視して話を進める千冬。

「では次にいく、三人とも武装を……内海のISは展開する武器がないんだつたな。ではオルコット、織斑、武装を展開しろ。」

「はい！」

「了解！」

雪片式型を展開した一夏と、スターライトMk-?を展開したセシリアだが、タイムはセシリアの方が速く、0.5秒で、一夏は0.7秒も掛かってしまっている。

「遅いぞ！織斑！0.5秒で展開出来るようにしろ！」

戦闘ではたとえ0.2秒でもその差は大きく、その一瞬で勝負がつく事もある。ましてや戦争ではなおさらだ。

「セシリアは速いね。代表候補生だけあって0.5秒ピッタリでライフルを展開出来るもの。」

「そ、そうですか？ まあ、私ほどになれば当然ですわ！」

「確かに流石だがなオルコット、銃を真横に展開する癖を直せ。お前は内海を撃つ気か？」

確かに千冬の言うとおりスターライトMk-?は真横に向けて展開されており、銃口は晴夏を捉えている。

「しかし……これは私のイメージを……」

「直せ、わかつたな。」

「……………はい。」

千冬の一睨みでセシリアは黙った。
この人に逆らうとろくな事がないそうわかっているからでもある。

「よしオルコット、次は近接武装を展開しろ」

「は、はい！了解ですわ。はぁ！……………むん！……………あ、あれ？くぬぬぬ……………この……………」

ブルーティアーズに唯一搭載されている近接武器、インターセプターを展開しようとしたセシリアだが、遠距離主体の彼女は近接武器の扱いに慣れていないため、展開が中々出来ないでいる。

「ああ！もう！インターセプター！！」

半ばヤケクソ気味に武器名を叫びなんとか展開できたようだがあまりにも時間がかかり過ぎている。

「遅い、時間をかけ過ぎだ馬鹿者。それでは接近された時に直ぐに落とされるぞ」

「実践では接近はさせませんわ！」

「なるほど、その心構えは認めるがつい最近イマジナリロードを使われたとはいえいとも簡単に接近を許し捕縛されたのはどこのことだ？」

「うっ……………」

痛い所を突かれ、セシリア黙ってしまった。

「次はISの基本的な飛行操縦を実演してもらおう。織斑、オルコット、内海、その場から急上昇しろ」

「はい!」

セシリアが先に飛び立ち、続いて一夏が急上昇する。
しかし晴夏は飛ばうとしない。

「あの〜……」

晴夏が恐る恐る手を上げる……………

「おっとラッシュバードは飛行不可能だったな。すまんあらかじめストレイバードを指定しなかったこちらに非がある。では内海ISをストレイバードに変更し直ぐに上空に上げれ」

「了解です!ストレイバード!」

ラッシュバードが消え、そこにはストレイバードが立っていた。

「あの時の……………」

「ストレイバードって言うんだあ……………」

「吸い込まれる様な黒だね……………」

「ラッシュバードと比べるとスマートで別のかっこよさを感じるっ……………」

クラス代表決定戦の時の感想を裏返す様な感想に晴夏は若干惑う。

「あはは……………それじゃあ、イマジナリイロード突入!」

その瞬間いきなり空間が裂けたかと思うとそこにストレイバードの

姿はいなくなっていた。

「うそ！消えた!?!」

「どこ??どこにいるの!?!」

「やれやれ……………馬鹿者共が、上を見る!」

千冬が若干呆れ気味で生徒達を上に向かせる。

すると遙か上空で待機しているブルーティアーズと白式の側にストレイバードがいた。

side一夏

俺は今えつと……………金髪ロールと共にISを展開し、上空で待機している。

「一夏さん!?!私の名前はセシリア?オルコットですよ!いいかげん覚えたらどうなんですか!?!それと私の事はセシリアとお呼びくださいませ!」

うお!こいつ俺の脳内を読みやがった!それに何時の間にか俺の事を名前で呼んでいる…

確か……………昨日の昼休みからだっただか……………?

「それにしても……………なぜ晴夏さんは上がってこなかったのでしょうか?」

「ああ、簡単だよ。ラッシュバードは飛行不可能なんだ。だからこの前の黒い奴に変えようとしてるんだろ、ほら。」

「飛行不可能なIS！？そんなの聞いた事がありませんわ！あの瞬間移動のような物ができるISといい……一体何者なんでs」わっ
！……」ひゃっ！？」

おお、いきなり目の前に黒い奴が現れた！
近くで見るとすごいな！

それにラザニアの変な声も聞けたし………

あ、あれ？なんか涙目になってるぞ？

晴夏ー。なんとかしろー。

side out

side 晴夏

あ、あれ？

軽く驚かそうと思ったのにセシリア、そんなに驚いたの？

しかも軽く震えて………あっ！

そうだった！セシリアにとってイマジナリイロードは若干トラウマ
になってるのか！

本当にどうしてあそこまでやっちゃったんだろ……

ああ、まずい！今にも泣き出しそうだ！

と、とりあえず謝らないと！

「セシリアごめん！あなたの気持ちも知らないでこんな物使っちゃ
って……普通に飛んでくればよかったね！本当にごめん！」

「すみません……やはりそのISへの恐怖心は完全に拭えせんわ
……グスッ……でももう大丈夫です。なんとか収まりましたから……

…」

「気分が悪くなったらいつでも言っただけ？ね？」

「二人共、私語はそこまでにしておけ。次は急降下と完全停止だ、目標は地表から10cm、内海、オルコット、織斑の順番で降りて来い。オルコット、体調が優れないなら無理をするな。」

「大丈夫です！この程度で結果に支障を出すセシリア？オルコットではありませんわ！晴夏さん！失礼ながらお先に行かせていただきますわ！」

そういつてセシリアは急降下して行った。

私はハラハラしながら見守っていたけど地表から10cmで完全停止させられたみたい。

よかったあ……………」

次は私の番だね。

「それじゃあ一夏、お先に！」

「おお！気をつけるよー。」

私は下に急降下して行った。

地面まであと10m……………」

5m……………」

1m……………」

30……………」

20……

15……ここだ！

私が完全停止した位置を図ると12cmだった。

まあ初めてにしてはよくやった方……かな？

セシリアは褒めてくれたし……

でも織斑先生には注意されちゃった……

次は一夏の番だね。

side out

side 一夏

「次、織斑！」

ソマリアと晴夏も成功したし俺も成功させないとな！

俺は急降下を始めた。

よし、この調子なら楽勝だな。

グラッ！

あれ？

ちょ、ドラ もん、ドン ラ粉をド ブラ粉をっっ！

俺の願いも叶わず結局バランスを保てず地面にダイブしてしまった

……

とほほ……

side out

「馬鹿者・・・グラウンドに穴を開けてどうする！誰が地面に激突しろと言った？それとも貴様は身体にドンブ 粉でも塗りたくっていたのか？」

「お、織斑先生！？」

流石は姉弟、やはり発想は似ている。

しかし穴の中で地面に頭を埋める一夏に容赦無い千冬の激怒が飛ぶ。

「織斑、自分で開けた穴は自分で埋めておくように……………人に頼るなよ？」

「了解……………」

相変わらず厳しい千冬だが、晴夏は一夏に背を向けた後の千冬の表情を見て悟った。

一夏に怪我が無い事に安心して、少しホツとした表情を浮かべているのだ。

何となく、素直じゃない千冬に、内心苦笑しながらセシリアの方へ向かう。

既にISは解除しており、授業も終わったので一緒に校舎に戻るのだ。

もう一つ、念の為保健室で精神的^{トリック}外傷が強くないか診てもらおうのだ。

「セシリア、念の為異常がないか保健室に行こう？」

「えっ！？は、はい！（二人きり……………二人きり……………／／／）」

恋する乙女は凄まじい例え些細な事でも嬉しがるのだから。

「くっそお……………不幸だ」織斑君！ですからダメですってば！」「う
……………」

誰もいなくなった校庭の穴を埋めながら咳こうとした一夏を何処か
らともなく現れて突っ込んだ山田先生であった……………」

神「よっ!」

ども。

神「いきなりだけどさ、一夏クレーターって誰が名付けたんだ?」

私です。これはもう一夏クレーターしかないと思いましたが。

神「お前のそのセンスに脱帽するよ……………w」

笑うなよ!じゃあ代わりにいい名前考えろよ!

神「それとセシリアは本当に恋する乙女だな……………相手がおかしいけど……………」

セ「トイボックス?ええ、今送った座標にハーブーンをありったけ発射してくださいな、ええ全弾で構いませんわ。」

神「ちょ、作品違う!」

晴「中の人は同じです!全く問題ありません!」

神「そういうことじゃn…ぎゃあああああああああああ!?!?!?!?」

千「この小説の意見、苦情、アドバイス、感想をガンガン待っている。こいつの今後の精進の為だ。遠慮せずに送ってやれ。それにこ

んな文だろっが読解力も付くぞ！」

山「えっと、じ、次回もお楽しみにゆい！」

千「山田先生……………」

episode 11 昔ころ し屋で千冬姉を転ばせる事が可能か考えたよ……

どもっ！八角ドライバーです。

今回はぱーてー！ぱーてー！

ですよ！

これ規制ギリギリかもしれん……

ではでは、どぞ。

「それでは！ 織斑君のクラス代表決定おめでとうーっ！！」
『おめでとーっー！！』

クラッカーが鳴り響き、それぞれが手に持ったグラスで乾杯をする
とパーティーが始まった。

テーブルには皆が持ち寄ったのか様々なお菓子やジュースが並んで
おり、自由に取って食べるといふ形になっているらしい。

「織斑くん頑張ってるね！」

「応援してるよ！」

「あ、ありがとう……」

一夏も女子達のこのテンションについていけず思わず敬語になって
いる。

晴夏はというと少し離れた所で他の女子達に質問攻めを受けている。

この女子達、実は一夏ではなく晴夏の事を追い回しているのだ。

「内海さんって趣味とかあるの？」

「内海さんって何食べるの？ここにあってたら盗ってくるよ！」

「内海さんって付き合ってる人とかいるの？」

「内海さんって攻め？受け？」

「ウツミサンツテウツミサンツテ」

「ちょ、ちょっと待って！一つずつ答えていくから落ち着いて！趣
味は……ゲームかな。」

「私今度ゲーム買ってこよう！！そして内海さんと一緒ゲームして

その後……」

「好きな食べ物甘いものかな。」

「ちよつと探して盗ってくる!」

「付き合ってる人はいないよ。よく虐められてたし……」

「ちよつとそいつ探して殺ってくる……!」

「攻め受けてるのは……ごめんね、よくわからないや」

「じゃあ私もしつもん。はるんって可愛いしスタイルいいけど何をやったの?」

「((ナイス! 布仏さん!))」

この質問に多くの女子が耳を傾ける。

「んー、特に何もしてないんだけどなあ……」

「牛乳たくさ〜ん飲んだとか?」

「私牛乳は飲めないから……」

「なん……だと……! ?」

「神様……どうして……」

「これが運命ならまずはこのふざけな……それは言っちゃダメ! !」

「むう……ずるいぞはるん! こつなつたら……えい! !」

突如のほほんさんが晴夏の後ろに回り込み胸を揉んでくる。

「ふにゃあ! ? や、やめて……布仏さあつ! ? んっ! ! ……あつ……」

「はるん大きくて柔らかくて気持ちいい。それに声があつちなな」

「ふにい……………はあ……………はあ……………」

「布仏さんマジGJ!!!」

「これで思い残す事はないわ……………」

その光景を見たセシリアが慌てて止めにくる。

「の、布仏さんっ!?!何をやっていきますの!?!今すぐにおやめなさい!?!」

「ええー、すっごく柔らかいのに……………もういいや〜」

「晴夏さん!?!お気を確かに!」

「せ、セシユイリああ……………」

晴夏、K・Oにより途中退室。

セシリアが晴夏を部屋まで送って行った。

「セシリアああ……………私怖いよおお……………」

「も、もう大丈夫ですわノノですからゆっくりとお休みになられて……………」

「違うんだよおお……………」

「?何が違うので……………?外?」

晴夏が弱々しくゆっくりと外を指差したのでセシリアは外を見に行く

「別に何処もおかしい所なんt……………ああ!?!」

晴夏が指差した場所を発見し、セシリアは驚愕する事になる。

内海晴夏

” 布仏本音”

「晴夏さん……合掌、ですわ……」

「怖いよおお……」

晴夏は恐怖に身を震わせながら眠りに落ちていった……

一方その頃……

「話題の新人生のインタビューに来ました！ 新聞部副部長二年の
黛薫子です。はいこれ名刺！ よろしくね〜！」

一夏は新聞部のインタビューを受けていた。

「まず織斑君に、ずばりクラス代表になった感想とか聞かせてくれ
るかな？」

「まあ……何と云うか……頑張ります」

「え〜、それだけ〜？ ま、いつか……そこは適当に捏造するか
ら良いとして」

「ね、捏造!?!」

次は内海さん……ってあれ？来てないの？

「晴夏さんは……突如の体調不良により、途中退室してます。その付き添いでレプリカさんも途中退室です。」

一部始終を見ていた女子がそれに答える。

（私の名前はセシリア オルコットですわ！！）

皆の頭にそう響いてきた気がするが気にしない。てか自分で て……

「しょうがないな！。じゃあその二人はまた今度にして写真は織斑君だけ撮ろうか。1・1の男操縦者、そしてクラス代表生として！」

「はいじゃあ……3・2・1。」

パシヤ！

「うん、いい写りだね、ありがとう。それじゃ……！」

なんやかんやありパーティーも終わって皆が自室に戻っている中一人の生徒がこれから本番だとも言つようなオーラを出していた。

「ふっふっふ……はぐるん。夜はまだまだ長いんだよ……！」

episode 12 ツインテ+貧乳+小柄+八重歯ハチヘヂなあーんだ？（前書き）

どもっ！八角ドライバーです。

やっとあの娘が登場ですよ、セカン党の皆さん！

ではでは、どぞ。

翌日。

「おはよう、晴夏！」

「……………おはよう……………」

クラスに入ってきた晴夏に一夏が元気良く挨拶をする。

しかし晴夏はかなり体調が悪そうだ

「おいおい、体調悪そうだけど大丈夫か？昨日も何時の間にかいなくなってたし……………」

「！？……………（ガクガクガクガク）」

「お、おいどうス、ピ。ハンですわっ！」「うわっ！？」

突然様子の変わった晴夏に驚く一夏に

セシリアがどこからともなく叩いても痛くないハンマーを呼び出し一夏の頭上に投下させた。

「一夏さん！？あなたは少し空気という物を読む努力をした方がいいですよ！」

と言っているが気絶状態に陥った一夏に聞こえているわけがない。それに気づかないセシリアは……………

「どうやら少しお仕置きをしなければいけないようですわね……………穢れなき風、我に仇なす者を包み込まん、イノント・シャイン！」

「ハッ！なんで俺意識を……………ってうわあああああああああああああああ
あああ！？！？！」

ちなみに詠唱文はマ ソロ2・3からである。

そんなやりとりをしているうちに千冬と山田先生がクラスに入ってきた。

「お前らー、席につけ。朝のSHRを始める。っておい、織斑はどこだ？」

その後一夏の姿を見た者は、誰もいなかった……

と思われたが、

校庭に倒れて気絶している所を先生達に発見されたんだとか……

放課後。

クラスでワイワイと騒ぐ一夏達。

そこに筈が思い出したかのようにある事を話す。

「そういえば……これは噂なのだが中国の代表候補生がIS学園に転入してくるらしいんだ……」

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

それを聞いたセシリアが何時もの様にポーズを取りながら言った。

「別にこのクラスに入るわけじゃないんだろ？ だったら騒ぐほどの事でもないだろ。」

「そ、そうか……」

筈は思ったより一夏が話に食いついてくれなくて残念そうだ。

まあ食いついたら食いついたで嫉妬しそうだが。

「でもその専用機持ちはクラス代表じゃないからあんまり脅威ではないよ〜それよりは〜るん〜……」
「の、布仏さん??」

どこからともなく現れたのはほんさんが晴夏に飛びついてくる。

「ちょ、ちょっと待って!えい!!」

パシーン!

晴夏は千冬の十八番 (?) 主席簿ハンマーを近くにあった教科書で代用し、飛びついてきたのはほんさんの頭部を叩いた。

「むむ……無念…ガクツ…」

「は、晴夏……」

「つい……」

ゴスツ!

「こ、この音は!??」

元祖主席簿ハンマーの音がした方をみると、入り口の所で小柄な女子が千冬の主席簿ハンマーを食らっていた。

「つた……!何すんのよ!!」

「通行の邪魔だ、どけ。」

「ち、千冬sゴスツ!……」

「織斑先生だ、馬鹿者。」

千冬の知り合いなのか名前を呼ぼうとして再び主席簿ハンマーを食らう少女。

そのやりとりを見て何かに気づいた一夏が

「鈴……？お前鈴か！？」

一夏の言葉に気づいた鈴と呼ばれた少女は千冬から逃げるようにこちらに走ってきた。

「そうよ！中国代表候補生、ファン・リンイン鳳鈴音今日は宣戦布告に来たってわけ」

「それはいいけどなんでお前あんな所に突っ立ってたんだ？」

「それよ！せっかくカッコ良く登場しようと思って待ち構えてたのにその女がタイミングをズラしたせいで入るに入れなかったのよ！オマケに千冬さんに殴られるし……」

「合わない事するからだろ。」

「うっさいわね！久々に会ったっていうのに……それより、このクラスにアンタの他に専用機持ちがいるって聞いたんだけど？」

専用機、と聞いて何時ものポーズを取り喋り出すセシリア

「それはこのイギリス代表候補生のセシリア・オルコットに違いありませんわ！」

「へー、そうなんだ。あんたが噂で「慈悲無き黒鳥」とか「大地に構える大鳥人」とか言われてるんだ……意外ね。」

「は、はい？私の専用機はブルーティアーズ。鳥と呼ばれる部分は微塵もありませんわよ！？」

「じゃああんたじゃないんだ。もしかしてデマ……………」
「あのー…………それって私の事？」

なんとかのほほんさんを撃退（気絶）させた晴夏がおそろおそろの手を上げる

「あんたあ？なんかますます意外って感じよ？」

「というかそんな事言われてるんだ……………」

「たしかに晴夏のISはまるで鳥のようだからな。それにこの前の試合を見たらそう呼ばれるのも頷けるな。」

「それはそうと、宣戦布告ってなんの事だ？」

「ああ、それはね。今日から私がクラス代表になったか」「おい、今日はアリーナを使用する日のはずだぞ！」「」

「あつ！やべえすっかり忘れてた！皆急ごうぜ！ああ、鈴！話はまた今度な！……」

箒の言葉で思い出した一同は慌ててクラスを飛び出していった……

残ったのは先ほどから固まったままの鈴と
気絶したのほほんさん。

「な、なんなのよおおおおおおおおおおお！……！！」

その日学校中に一人の少女の叫び声が響き渡ったという……

神「よっ！」

はいどーも

神「使っちゃまったな術、しかも秘奥義。」

ええ……使ってしまったね。しかもピコンまで。

セ「私、自分でも驚きですわ！」

ー「頼むからもうやめてくれ……」

神「そしてお前は初登場キャラを虐める癖でもあるのか？」

いや、そついうわけじゃ……

神「もしかして無意識か？だとしたらものすごい変態だな。」

ー「てか変態だろ？」

箒「変態だな。」

セ「変態ですわ。」

晴「変態だね。」

神「あ、やり過ぎた。まあいいか。」

セ「この小説の意見、苦情、アドバイス、感想をガンガンお待ちしておりますわ！」

—「次回も楽しみにしてくれよな！」

episode 00 目覚めた能力（前書き）

どもっ！八角ドライバーです。

すみません、スクライド見て遅れました。

ー「このダメ作者！」

そんな事言わないで！

だって徐々に萌えじゃなくて燃えアニメを見つけたんだもの……

さてさて今回はちょっと前にどこかに書いたセシリアの能力について書きます。

ー応番外編………となると思います。

ー「それじゃあ本編………なのかな？楽しんでくれよな！！！」

episode 00 目覚めた能力

sideセシリア

「やはり……勘違いではありませんわ。」

私セシリア・オルコットは確信しましたわ。

そこのセシリア・オルコットは確信したんですの！

なぜ二回も言ったかという名前を覚えてもらうためですわ！

やれモルモットやらアルフォートやら拳げ句の果てには他の方
にまでジャックポットと呼ばれる始末……

畜生！ジャックポットなんて思いつかなかったぜ！by八角
ドライブ

「貴方は少し黙っていてください！！」

つといけませんわね…これじゃただの残念な人と思われてしま
いますわ。

話を戻しましょう。

あれは決闘後、体調も戻り次の日からいつも道理クラスに向か
った日の事ですの。

なんですの……？

（いつもと感覚が違う……クラスにいる人の位置が見てもないのに……わかる……それに……人の動きが……読める？）

いきなりなぜこんな事になったのか私はわかりませんでしたの。

しばらくして私はこの不思議な感覚を解明したくなり、昨日ある検証を行いましたわ。

「す、すごい……オルコツトさん、クラスの皆にじゃんけん勝つちやった……しかも無敗……」

「なにかコツでもあるの？」

これで一つ確信しましたわ。

観察力が以前より格段に上がってますわね。

種を明かすと相手の集中して見てほんの僅かな癖や手元を見たことで全勝無敗を勝ち取れたのですわ！

これでわかった事が一つ

織斑先生の教室での瞬間移動の方法の内の一つを解明しましたわ！

電子ボード前の辺りは足下が高く段差がありますの。

その段差を利用し僅かな壁を蹴り、その瞬発力で生徒（主に一夏さんですわね）に一気に接近し主席簿ハンマーを浴びせる……

あのブリュンヒルデと呼ばれる織斑先生だからこそ出来る芸当です
わね……………

それともう一つは……………これは放課後に試しましょう…

くそして放課後く

私はいつものメンバーに集まってもらい

「皆さんに手伝って欲しい事がありますの、少し時間を取るのですが……………手伝ってもらえますでしょうか？」

「いいぜ。皆もいいだろ？」

「一夏がやるなら私もやるっではないか。」

「勿論手伝っよ！」

「皆さんありがとうございます！しかしこれでは人数が少ないです
わね……………」

「ちょっと待って……………布仏s「はるん呼んだく？」「ちょっと手伝
ってー！」

「おお、いきなりだねえ……………報酬は？」

「う……………1分でどうかな？」

「5分、だね。」

「5分！？せめて2分で……………」

「じゃあ3分。これ以上ははるんでも譲れないよ」

「じゃあ……………3分でいいです……………」

わざわざ私のために自分を犠牲にしてくれるなんて……………晴夏さん……………

……………感謝しますわ……………

後一人は欲しいですわね……どうせなら……

教壇前で話している山田先生と織斑先生に協力を仰いだ所了承を得る事が出来ましたので検証に移りますわ。

結果……………

「オルコットさん凄いですね！も、もしかして超能力ですか！！？」

「まさか本気で気配を消した私をいとも簡単に見つけるとはな……

……

「すごいな、セシリア！千冬……織斑先生を簡単に見つけるなんてな！」

山田先生がやや興奮気味で訪ねてくるのを織斑先生が落ち着かせ一夏さんが私を褒めてくれました。

これで二つ目に確信した事がありますわ！

なんといいばいいのでしょうか……

「空間把握能力」とでも言えればいいのでしょうか？

私を中心におそらく……アリーナ程の範囲までの空間を完全に把握する事が出来るみたいですの。

例えどんなに気配を消しても範囲の中なら何処にいるか探知が可能らしく現に本気で気配を消した織斑先生を簡単に発見出来ましたか

ら……

そして弱点もわかりましたわ。

壁を挟んでの探知は不可能（但し、バリケードといった障害物越しは可能）という事ですわね。

これはもしかしたら応用が聞かもしかれませんわ……これについては明日にでも検証しましょう……

「皆さんありがとうございます。これで終わりですわ！」

「なんだ？ただ徐々に範囲を広めながらかくれんぼやっただけじゃねえか。」

「しかもセシリアが全部鬼やって……本当に変わらなくてよかったの？」

「ええ、よかったですわ。皆さんありがとうございます！」

「さあはぐるん……部屋に行こうか……？」

「うう………わかったよお（しゅん）」

.....

そして今に至るといっわけですわ！

そして今わかった事を挙げておきますと……

- ・ 空間把握能力はB T兵器に応用が可能
- ・ これによりB T兵器操作中でも移動や自分でも攻撃が可能
- ・ B T兵器の操作可能上限もおそらく増えている。

「本国にB T兵器の追加搭載を申請しませんと……今の分も含めて

……10基は同時稼動が可能……ですかね」

side out

そしてブルーティアーズは強化され、一夏達の度肝を抜くこととなるのは少し後の話である。

episode 00 目覚めた能力（後書き）

セ「ごきげんよう。」

はい、ごきげんよう。

セ「私すごい事になりましたわね……」

これは書く前から考えていたんだ。

セ「なるほど……しかしなぜですか？」

遠隔操作武器ってかっこいいじゃん！

セ「それだけですか……まあ自分が強くなる事に悪い気はしませんわね」

それにますます狙撃型として固まってゆくわけだ！

セ「それは……素晴らしいですわね!!」

だろ？素晴らしいだろ！？よし、この勢いでいつものアレやっちなえ!!

セ「了解ですわ！この小説の意見、苦情、アドバイス、感想をガンガンお待ちしておりますわ！」

次回の内容を簡単に言っと

酔豚

馬に蹴られて死ね！

だぜ！

セ「次回も楽しみにしててくださいませ！」

あんけーとを取ります。(前書き)

どもっ！八角ドライバーです。

あんけーと取ります。あんけーと。

詳しくは本文にてどうぞ。

あんけーとを取ります。

突然ですがアンケートを取ろうと思います。

一夏vs鈴戦に乱入するアレについて、です。

お一人様一票で

- 1・原作通り
- 2・スパロボLのオリ敵インペリアルヴァレイ
- 3・思い切って別作品のを取り入れる
- 4・みんなのかんがえたおりじなるあいえす

のうちのどれかに投票をお願いします！

3or4になった時は別にアンケートを取りますので

自分がしてほしいと思った番号を感想、もしくは同タイトルの活動
報告記事にて投票をお願いします！

ユーザー名を晒したくない方はメッセージ機能で投票をお願いします！
す！

締め切りは………8/15日までとさせていただきます。

では皆さんこれからも

インフィニットストラトス〜青空に向かって歩け〜

をよろしくお願いします！

8 / 12 投票方法について追記。

あんけーとを取ります。(後書き)

神「よっ！」

はいどーも。

神「皆！ガンガン投票してくれよな！あまりにも少ないと俺が勝手に決めちゃうぜ」

こんなことをさせないためにも皆さんどうかよろしくお願いします。
ちなみに8/15までに前話の後書きに書いた話を投稿する予定です！

神「それじゃ皆またなー！」

episode 13 片道切符だYO!!! (青い音速ハリネズミ風味) (前書

どもっ！八角ドライバーです。

昨日(今日)？大きな地震があつたみたいですね…

私は気づかずに爆睡してましたorz

自分みたいな人は災害で真っ先に死ぬタイプだろうなあ……………

いかねがてぶになってきた。

では、どぞ。

episode 13 片道切符だYO!!! (青い音速ハリネズミ風味)

「セシリアすごいね！何時の間にあんなにBT兵器を自在に操れるようになったの!？」

「前に俺と模擬戦やった時にはBT兵器使用中は動けてなかったのにな。これで弱点が無くなっちゃったな……」

アリーナの使用時間が終わり、晴夏達は夕食を食べに食堂に向かっている中

先程の訓練でのセシリアの変わりっぷりに驚いているのだ。

「このセシリア・オルコットに不可能などありませんわ！そして近日BT兵器を追加する事が決まりましたの！ブルーティーズは生まれ変わるので！」

「でもよ、BT兵器って追加し過ぎるとハリネズミみたいになるんじゃないか？」

「確かにそうだな……では名前をブルーティーズからブルーヘツジホッグにしたらどうだ？」

「それは名案だな筈！でも青いハリネズミか……なあセシリア、機体のスピードを限界m「私は冒険好きの音速ハリネズミではありませんわ!！」」

なんだか危ないやりとりが行われながらも一同は食堂に着いた。

それぞれが夕食を買い、丁度座れる所も見つかったから席に向かうとすると晴夏が何かにぶつかった。

「あつと、ごめんなさい。前見て歩いてなかったから……ってあれ？」

だが目の前には誰もいない。

「え？じゃあ今ぶつかったのは……」「ちよつと……」「え？」

不思議に思っていると自身の下方から声が聞こえた。

晴夏が下を向くと……そこには鈴が床に尻餅をついていた。

「痛いじゃないのよ……」

「ご、ごめんなさい！（前が）見えてなかったから……」

「はづう！？」

「次からは（前を見るように）気をつけるから……ごめんね！？」

「う……く……」

「「~~~~~！！」」

話が（悪い意味で）かみ合っている二人を見て一夏とセシリアと篤は必死に笑いを堪えている。

「そつ……」

「え……？」

「あんたみたいに大きな奴は私みたいなチビは視界に入らないわけねっ……」

「え？ええ！？！？」

「何よ何よ！ちよつとばかり大きいからって……だいたい大きい奴はね！比例して胸が小さいって相場が……orz」

「え、えつと……鳳、さん？」

自身の全てを全否定された気分になり見事なorz体勢を作る鈴。

「えつと大きくてもいい事ないよ？頭よくぶつけるし、映画館では後ろの人に申し訳ない気持ちになるし、あまり甘えられないし、電

車内で混んでる時に頭が出るから呼吸しやすいし…高い所の物も簡単に取れるし………」

「途中から自慢になってるじゃないのっ！！そして一番の問題はこれよー！」

ズビシツ！と晴夏の胸に指を突きつける鈴。

「何食つたらこんなになるのよ！牛乳？牛乳なの？牛乳なのね！？」

「（あれこれデジャヴ……）いや、私牛乳飲めないし………」
「そん……な……」

地面に膝をつき呆然となる鈴。

とりあえずこのままにしておくのはよくないと判断し自分達の座る席に座らせる事にする。

とりあえずこのまま放置して一同は夕食を取り、それぞれの部屋に戻ろうとする所で鈴が目覚めた。

「……………はっ！？私は…！？そうだ！一夏、いちかー！！」
食堂から出ようとする一夏を呼び止め、話があるから部屋に行かせろと言う鈴に一夏は、

「いいけど、あのラーメンお前のだろ？伸びてんぞ？」

一夏の指差した先には確かに鈴の頼んだラーメンがおいてあった。スープを吸いきって伸びに伸びきっている。

厨房にはこちらを見て笑顔で

「お残しは許しませんでえ！（ゴゴゴゴゴ……）」

と言うおばちゃん。

鈴は涙目になりながら伸びきったラーメンを食べるのであった。

そして時が進み一夏と篝の部屋。

若干篝が空気気味の中、鈴がある話を持ち出す。

「ねえ…あの約束…覚えてる？」

「約束？」

「私が引つ越す直前にしたじゃない…」

「？……あ！もしかして鈴が料理上手になったら……」

「そうそれよ！」

「毎日酢豚奢ってくれるって約束だろ？」

「………は？」

鈴が（。。。）な顔になりながらも一夏は話を続ける。

「いやー嬉しいぜ。鈴の家の酢豚美味かったからなー」

「………かの……」

「ん？」

「一夏の馬鹿ー！！！」

バチン！

「つてえ……何すんだよ鈴！！」

「うるさい！馬鹿！馬鹿馬鹿！！」

「何なんだよ！それともなんか別の意味でもあったのかよ！？」

「そ、そんなの……言えるわけじゃないのー！！」

バチーン！！

再度鈴の平手打ちが一夏の頬に決まる。

「最低っ！私があんなに勇気を出したのに……いいわ！クラス代表戦でボコボコにしてやるから！」

「……っ！望む所だ！やるからには容赦しないからな！」

と一触即発し、鈴が乱暴にドアを開けて出ていった。

「鈴の奴……覚えてろ……！」

「おい一夏。」

「ん？なんだ筈？」

「馬に蹴られて地獄に落ちろっ……！」

「のわあああああ！？」

勢いよく放たれた拳が腹に直撃し、一夏は気を失う。

「筈まで……なんなんだよ……ガクッ」

後日、クラス代表戦の組み合わせが発表され
一夏達は一回戦第一ブロックを見て驚愕する事になる。

一回戦第一ブロック

一年一組

織斑一夏

対

一年二組

鳳鈴音

クラス代表戦まで後一週間……

神「よっ!」

はいども。

神「本当新キャラの扱い、な!」

すみません……

神「セカン党の俺としては許すまじき行為だよ?チミ。」

あんたセカン党だったんですか。

神「おう!お前も早くなんかの党に入れよ。コウモリ野郎は……死ぬぞ?」

とは言われましてもね……

神「あ、そだそだ。アンケートの投票方法についてお知らせがあるぞ!」

そーでした。アンケート投票方法についてお知らせです。

感想や活動報告だとユーザー名が残って恥ずかしい……

なんてシャイな方の為にメッセージ機能で投票を追加しました!

これを使えば私だけにしかユーザー名がわからない!

神「なんて便利な機能なの!?これさえあれば恥ずかしがらずに投票できるわ!」

投票締め切りは8/17日までです。

皆様ガンガン投票をお願いします！

今の話はアンケートの所に追記しておきますので！！

それではいつものやりますか！

第「この小説の、意見、苦情、アドバイス、感想をガンガン送って
くれ。」

セ「次回の更新は8/17日以降となりますわ！」

一「次回の内容を簡単に言うと『俺VS鈴』『乱入』だけ！」

晴「次回もお楽しみに！！」

あんけーと結果（前書き）

どもっ！八角ドライバーです。

いよいよアンケートの結果発表ですよ！

ではでは、どうぞ。

あんけーと結果

神「よっ！本文では久々に登場の神様だぜ！

はいどーも。

では早速……

神「やるか、結果発表。」

やりますか。

皆様のおかげで多くの表が集まりました！

今回の投票内容は

クラス対抗戦、一夏vs鈴戦に乱入するアレについて、です。

- 1・原作通り
- 2・スパロボLのオリ敵インペリアルヴァレイ
- 3・思い切って別作品を取り入れる
- 4・みんなのかんがえたおりじなるあいえす

神「そんじゃ結果発表行くぜ」

1、15票

2、8票

3、2票

4、0票

でした！

神「やはり1と2が多いなー。4は……………うん。」

まあ4はネタですから。

メッセージ投票をアリにすると皆さんとても送ってくれました！

神「皆シャイなんだなー」

それでは一夏vs鈴戦に乱入させるのは原作通りゴーレムとなりました！

しかしそれだけでは物足りない気がするので……………

戦闘後にちよつと別展開させようと思います！

神「おま……………それ聞く意味……………」

馬鹿野郎！それを言うな！！

今回アンケート取ったのは乱入させる機体だから大丈夫と思ったの！
そう思わないとなんか怖いんだから！

神「言い訳乙、と言っておこつ。」

うう……………

締めるぞ！

神「うわ……強引……まあいいか。」

投票してくださった皆様、

3に投票し意見を送ってくださったお二人方、
誠にありがとうございます！

神「これからもインフィニットストラトス〜青空に向かって歩け〜
をよろしくな！」

あんけーと結果（後書き）

第「暇……だな。」

セ「暇……ですわね。」

第「一夏は特訓中、晴夏は布仏に捕獲された……」

セ「そうですね……」

第「あの作者とよくわからん奴がいないだけでこつも暇になるとはな……」

セ「あのお方は一体誰なんでしょうね？」

第「私達だけではどうにもならん、もう締めるか？」

セ「そうでしょうか、ではいつものアレを……」

第「この小説の意見、苦情、アドバイス、感想をガンガン送ってくれ！」

セ「次回も楽しみにしていってくださいませ！」

episode 14 クラス対抗戦（前書き）

どもっ！八角ドライバーです。

長い事間空けてたので駄作者 凡骨作者になつてる気がします…

それに今回は戦闘…

凡骨文しか出来る気がしない。

あ、ちなみに一夏をちよっぴり強化してます。
では、どぞ。

episode 14 クラス対抗戦

side 一夏

いよいよクラス対抗戦が始まる。

俺はアリーナの中央で鈴とISを展開して試合開始を待っている。

鈴は大型の青龍刀…だったかな？剣の柄を連結させ、手に持っている。

例えるなら緩やかなS字になった状態って言ったらわかりやすいかな？

あと鈴のISには両肩部になんかトゲトゲした球体みたいなのが浮いていた。

なんかアレだな。無 OROCI に出てくる 妃みたいだな。と
思ってたら鈴が偉そうにこちらに喋りかけてきた。

142

「一夏、今謝れば少しは手加減してあげてもいいけど？」

「そんななんいらん。全力で来い、それに俺に謝る理由がないだろ。」

「んなっ……一応言っておくけど、シールドエネルギーを突破出来る攻撃力があれば絶対防御に関係なく本体にダメージを与えられる。意味わかってるわよね」

わかってる。それは事実で操縦者のみにダメージを与える装備は競技規約違反で禁止されてるらしいからな。

現に晴夏が決闘でカナリヤにそれやって反則負けになってたからな。
あの時の晴夏は怖かったな……………

くある観客席にてく

突然セシリアが立ち上がり大声で叫びだす。

「わああああたくしの名前はああああああああ！……！！！」

「セ、セシリア??」

「セシリア・オルコットですわああああああああああああああああああ……！！！！！」

「（ああ、きつと一夏がまた名前を間違えたんだろうなあ……それも鋭いなあ……）
晴夏はそう思ってたセシリアをなだめるのだった。

くアリーナ中央side一夏く

ん？なんか今聞こえたような……まあいいや
でも、規約を守っている装備で『殺さない程度にいたぶる』ことは可能……になるんだよな。

鈴の口振りからしてきつと鈴はそれが可能な武器があるんだろうな。

「それより鈴……聞きたい事があるんだが……」

「何？私に勝つ方法なんか無いわよ。」

「ちがうわっ！！その手に持つてる剣の事だよ！」

「これ？これがどうしたの？」

「それって青龍刀……だよな……？」

「へ……？そ、そうだけど……」

「そうか！よかったああああ。さっきからそれが気になって仕方がなかったんだよ！」

「あ、あんたねえ……へこ、これより、クリヤス対抗戦一回戦第一ブ

ロック、1 - 1 代表織斑一夏対1 - 2 代表鳳鈴音の試合を始めます
！両者準備はよ、よろしいでしゅか？」

おっともう試合開始か。

てか山田先生……何をそんなに緊張してるんですか…
噛みすぎですよ…

とりあえず準備OKの合図でも出しとくか。
俺は両手を上にあげた。

何処からかコロンビアって聞こえたが気にしない、そいつ
はいいセンスしてるな。

鈴は……連結させた青龍刀を上にあげ一回転させる。
どうやら鈴も準備はいいみたいだな。

《そ、それでは試合を始めますっ！試合開始！》

試合開始のブザーが鳴り響くと同時に俺と鈴は動き、俺の雪片式型
と鈴の連結青龍刀（仮名）がぶつかり合う。

「へえ、初撃を受け止めるなんてやるじゃない。」

「そいつは……どうもっ！」

鈴のISは俺の白式より力があるみたいだな。

でも鈴は女子、しかも体格も小さい。

俺は罅迫り合いを終わらせ、鈴を前に押し飛ばす。

押し飛ばされた鈴はなんとか体勢を立て直し連結青龍刀を構え直す

が遅い。

俺は押し飛ばすとほぼ同時に鈴に向かっていたからな。

鈴が気づいた時には俺は鈴に一太刀浴びせていた。

「くっ……やるじゃない一夏！でもね！これならどう!？」

鈴のISの肩部の球体が開き内部から現れた球体が光った瞬間、俺は目に見えない衝撃に『殴り』とばされた。

「んなっ……!?!？」

「今のはジャブだからね、威力はまだ上がるわよ!！」

今のがジャブ………てことは次がストレート…本命か!！」

ドンッ!——!

「くっ………」

さっきのとは威力が違う見えない衝撃に殴られ、シールドバリアーを貫通して痛みが身体を襲う。

これが鈴の『殺さない程度に痛ぶる』武装か……

エネルギーも結構消費した。これはかなりヤバいぞ……!！」

くまたある観客席にてく

試合を見ていた晴夏が鈴の見えない攻撃を見て驚く。

「鳳さんのあの武装……一体なんなの!？」

実弾兵器なら空薬莖や硝煙が出るはず、
しかしビームといった光学兵器の類でも無さそうだ。

晴夏が疑問に思っていると、セシリアがそれに答えた。

それに答えたのは隣にいたセシリアだった。

「あれは衝撃砲ですわね。空間自体に圧力をかけ、砲身を形成、余剰で生じる衝撃自体を砲弾として撃ち出す、ブルー・ティアーズと同じ第三世代型兵器ですわ。あの兵器の特徴は『不可視』砲弾どころか砲身すら視覚できず、さらに射角制限がほとんど無く、真上真下、果ては真後ろまで撃つことが可能となっていますわ。直線射撃しか出来ませんが、鳳さんの能力が高いのでまさに欠点のない兵器ですわね。」

隣でそれを聞いていた篤が口を開く

「衝撃砲か……厄介な武装だな………（一夏…勝ってくれよ………）」

（アリーナside一夏）

くそっ!どうする!?

鈴のあの攻撃はハイパーセンサーの感度を高めて発射時に起こる空間の歪みと大気の流れを察知すればなんとかなる事がわかったが、
発射された後じゃどうしようもない!!

どうする!?!せっかく千冬姉から教えてもらった瞬間加速もこの状

イグニッションブースト

況じゃ自殺行為だ！！

イグニッションブースト
瞬時加速とは、ISの後部スラスタ翼からエネルギーを放出、その内部に一度取り込み、圧縮して放出する。その際に得られる慣性エネルギーをして爆発的に加速する。瞬時加速の速度は使用するエネルギーに比例する。外部のエネルギーを使用してもいい。使用中は加速に伴う空気抵抗や圧力の関係で軌道を変えることができず、直線的な動きになる。〈Wikipediaより引用〉

考える！考える！考える！考える！

でもあの武装には弱点がない…

なら鈴はどうだ！？あの武装を使う時に鈴に何か弱点はないのか！？

相手をよく観ろ！よく観るんだ織斑一夏！！

必ず突破口はあるはずだ！

と、その時

一夏はある事に気がついた。

みる？

視線……………？

試してみる価値は……ある！

俺は鈴の目を観ながら白式を動かす。

ハイパーセンサーは全方位を操縦者に見せる。だが正面の相手については自身の目で追ってしまうはずだ。つまりは視線で追ってしまうということ。人間が生まれながらもっている癖は簡単には直らない。ましてや不可視の攻撃だ。使用者本人はどうしても自分で見てしまっただろう。

一夏はその事に気づいたのだ。

……やっぱりな。

鈴は自分の視界に俺がいる時は自分で撃つ位置を見ている。そしてさっきまで視線があったところに砲撃が飛んでくるのをハイパーセンサーで感知する。

よし、これで当たる心配はなくなったな。

episode 14 クラス対抗戦（後書き）

神「よっ！」

はいども。

神「一夏強いなあなんつーか本番で力出すタイプなんだな。」

はい。

少なくともこの小説ではそゆことにします。

神「そして謎の乱入者か……」

これはかなりいい締めだったと思うんだZE

千「黙れ凡骨作者」

自覚はしてるが千冬さんに言われると凹む……orz

ツカツカツカ……

ん？何ですか？突然こっちにきて……

千「貴様につ！名前ですっ！！呼ばれる筋合いはっっ！！ないっっっ
！！！！」

ゴフッ！？見事な4コンボ……バタツ

神「おお、まるで格ゲーみたいだったな。そんじゃ締めるか。」

千「この小説の意見、苦情、アドバイス、感想をガンガン送ってくれ。なに、こんな凡骨作者だ。苦情のみでも送っても構わん。」

神「次回の内容を簡単に言うと、『謎の機体』『ブルーティアーズ』だぜ！」

千「次回も楽しみにしている。」

episode 15 乱入×混乱×蒼い零改(前書き)

どもっ！八角ドライバーです。

なんとか書けたぜ乱入編！

凡骨文？気にするな！

ではでは、どぞ。

episode 15 乱入×混乱×蒼い零改

side 晴夏

「な、何が起きたの?!」

「私に聞かれても困りますわ!とにかく一大事という事だけはわかりますわね!」

「何をもちもたしている!早く非難するぞ!」

「いえ!専用機持ちの私と晴夏さんは織斑先生の所に向かい、指示を仰ぐべきですわ!晴夏さん!行きましょう!」

「え、ええ!」

私とセシリアさんが織斑先生がいるモニタールームに向かおうとすると、篝さんも走ってついてきた。

「篝さん!? 貴方は専用機持ちではないのですから急いで避難を!」

「一夏が危険な目にあっているのに……私だけ逃げれるか!」

「でも!」

「それに、シャッターが降りているから戻る事も出来ん! 取り残された連中は心配だが……」

後ろを見ると入り口の扉が開かなくなっていた。

向こう側から扉をドンドンと叩いてるから本当に開かないみたい。

「そっか……それじゃあ急ごう!」

「ああ!」

「はい!」

side out

一夏と鈴は体勢を立て直し、落ちてきた何かに警戒をしていた。

「鈴。」

「ええ、こいつかなりヤバいわよ……」

二人がそれぞれの武器を握り直した瞬間

ピピピッ！

「ロツクオンアラート！？鈴！！」

「わかってるわよ！」

二人が元いた場所から離れたら、そこを巨大なビームが通り過ぎていった。

「ちよつとなんなのよ今の！あんな当たったら絶対防御なんて布切れ当然なんじゃないの？！」

「ああ、かなりどころじゃないヤバさだぞ、こいつ……」

なんとかしないと…と一夏が考えていると

『織斑君！鳳さん！』

山田先生から通信が繋がった。

『織斑くん！鳳さん！今すぐアリーナから脱出してください！すぐに先生達がISで制圧しに行きます！』

「……避難は」

『へ？』

「観客席に居た生徒の避難は、出来てるんですか？」

『え、ええと、それが……何故か扉が全てロックされていて生徒さん達はまだ中に、何人かは避難出来たみたいですがまだ大勢の生徒が閉じ込められています。』

「閉じ込められてるって事か。全てってことは教師陣もすぐには来られないんでしょう。ここは俺達が抑えます」

あの機体はアリーナのバリアを簡単に突破して侵入して来た。

ということはそれだけの攻撃力があるということだ。それは先程の攻撃で証明された。

一夏と鈴はISを装着している。

それにあの攻撃には無駄だろうが一応絶対防御がある。

が、観客席にいる生徒はやばい。

攻撃されれば、それこそただで済むものではない。

『だ、ダメですよ織斑君！生徒にもしもの事があつたら……』

「でも逃げる場所なんかないんじゃないの？今の話じゃピットの入り口もロック掛かってるって事でしょ？」

『しかし……』

『織斑、今教師陣と三年の精鋭達がシステムクラックを行っている。それが終われば避難と援護が可能になるからそれまで持たせる』

「千冬姉……了解。」

通信を切るうとすると最後に千冬姉の口が開いた。

『 ”一夏” 無茶はするなよ 』

「 (ちえ) …… お見通しってわけか) …… 了解 」

そして一夏は通信を切った。

side 一夏

さて、無茶するなって千冬姉は言ってたけど……

「 鈴！やるよな？ 」

「 当たり前でしょ！ 私達の試合を邪魔した事を後悔させてあげないと気が済まないわ！ 」

「 とは言っけどもう勝負決まってたたる？ 」

「 あ、あそこから大逆転してたわよ！！ 」

「 嘘つけ、お前 ” やられるっ！！ ” って顔してたもん 」

「 してないわよー！ピピピッ…っ とこんな事してる場合じゃないわね 」

「 ああ、そんじゃ …… いったいちょやってやるか！ 」

俺と鈴はそれぞれの武器を持ち直し、謎の機体に向かっていった

side out

sideセシリア

「『織斑先生！』」

「む？内海、オルコット、篠ノ之お前らは脱出してたのか。」

私は息を整え、織斑先生に申し出ましたわ。

「先生！私と晴夏さんにIS使用許可を！私と晴夏さんならすぐに突入出来ますわ！」

「内海、第二ピットがもうすぐ開くからすぐに迎え。だがオルコットお前はだめだ」

「なっ！？な、何故私だけダメですの！？」

「お前のISは一对多向きだ。多対一ではむしろ邪魔になる。内海のISも一对多向きだか多対一でも有効に動かすことが可能だ。それに高いビーム耐性を持っている。」

「そんなことありませんわ！この私が邪魔だなどと」

「ほう、では連携訓練はしたか？その時のお前の役割は？ピットをどういう風にする？味方の構成は？敵はどのレベルを想定してある？連続稼働時間はどうか？まだまだあるぞ」

「それでも！今の私なら！！」

少しだけ沈黙が流れました…

私はそれでも織斑先生の目をしっかりと見続けていました。

「どうやら、慢心やハッターではないようだな。オルコットも内海

と共に第二ピットへ迎え。」

「了解しまし……………」

その時、篤さんがモニタールームから出て行くのを感じました。

山田先生や晴夏さん、そして信じられない事に織斑先生も気づいてないようでした。

冷静に見えますが、おそらく一夏さんを心配してるのでしょう。

「晴夏さん!?!」

「な、なに!?!」

「たった今篤さんがここから出て行きました!私がピットに向かうので貴方は篤さんを追いかけて!今なら追いつけるはずです!?!」

「篤が?!?!本当だいな!?!わかったわ!?!」

晴夏さんが篤さんを追いかけて部屋を飛び出しました。

159

篤さん……………専用機持ちでもないのに何所へ……………

っと、こうしてる場合ではありませんわ!

私もすぐに第二ピットへ向かわないと!

side out

side 晴夏

篤?!?!何所に行ったの!?!?

……………いた!

上に……………上がってる?

一体何所に向かつてる……じゃない！
今は追いかけないと！！

side out

「織斑先生！織斑君達戦闘始めてますよ！？」

「あのバカ……無茶するなと言っただろうが！！」

「どうしまししょうどうしまししょう！？もしも織斑君達に何かあったら……」

山田がマジ泣きしそうになっている。

「山田先生、コーヒーでも飲んで落ちつけ。落ち着くには糖分を摂取するのが一番だ。」

そういつてコーヒーに白い粒子を入れていく千冬。

「……あ、あのう、織斑先生？」

「何だ？」

「それ、塩ですけど……」

ピタッ

三杯目を入れたところで千冬の手が止まった。大きく塩と書かれた容器にスプーンを戻す。

「何故塩があるんだ」

「さ、さあ……いろんな人の好みに合わせる為、じゃないでしょうか？」

「……………」

「あつ！ 何だかんだ言ってもやっぱり弟さんが心配なんですね！
？ だからそんなミスをするんですね？」

すると千冬がコーヒー（塩入り）を山田に差し出す。

「お疲れのようですね山田先生。どうぞ。」

「い、いえ結構です。というかそれは塩の」

「どうぞ」

「……………」

「どうぞ」

「…はい。」

後日、山田はこの部屋から塩を撤去したんだとか。

side 一夏

くそつ！こいつ渋と過ぎるぞ！！

俺の攻撃も手応えを感じた！

鈴の不可視の攻撃も何度か直撃した！！

なのになんだあのタフさは！？

あれ本当に人が乗ってんのか？！

人？

そういえばこいつなんか違和感を感じるんだよな。
まるで人間味がないというか…

攻撃が淡々としている感じ……

「なあ鈴。」

「なによ！？てかこいつタフ過ぎるわよ！何回直撃受けたら倒れん
のよ！！」

「こいつ機械かもしれない」

「はあ？ISは機械でしょうが。」

「そうじゃない！中に人が乗ってないみたいなんだ！！」

「ありえないわよ。ISは人が使わなきゃ起動出来ないもの。」

「でも人が乗ってたら俺達がこうやって話してる時に攻撃してくる
はずだ。」

そう、これまでの戦闘を振り返ると、俺と鈴が会話している時はあ
まり攻撃をしてこないんだ。

まるで興味があるみたいに聞いているように……。

鈴も俺の言葉を聞いて今までの戦闘を思い返しているみたいだ。

「でも仮に無人機だったとしてもどうなるの？」

「簡単さ、相手が怪我するとか考えずに全力で攻撃が出来る。零落
白夜を全力で使えば勝てるはずだ。」

「でも、どうやって当てるのよ？」

「ビームを撃ってくる時だ。その時あいつは反動で体を支えなきゃ

ならない。そこを狙う。」

「それ、失敗したらあんた蒸発するわよ!？」

「ちびちび攻撃して長期戦になるより一気に決めた方がいいだろ。それに被害が少なくなる!」

それにシールドエネルギーも持たないだろうしな。

「ったく!しょうがないわね。援護するから必ず成功させなさいよ!」

「ああ!やってやるさ!」

「一夏あ!!!」

俺が零落白夜の準備をすると何所からか聞き覚えのある声が聞こえた。

鈴じゃない。

勿論俺でもない。

誰だ?俺と鈴が声のした方を見ると…

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする!」

筈だった。

肩で息をしている。

ここまで全速力で走ってきたんだな。

じゃないよ!!

なんで箒がいるの！？
鈴なんか絶句してんじゃねえか！

「
」

やばい！敵ISの興味が箒に向けられた。

俺たちからセンサーレンズを反らし、箒をじっと見ている。

何を思ったのかビーム砲が着いた腕を箒に向けやがった！そしてビームを撃ち出そうとしている。

くそっ！ここからじゃ追いつけない！でも諦められない！！そんな人を見捨てるようなこと、出来るはずがない！！

そして砲口からビームが放たれた。

高出力のそれは視界を覆い尽くしそんな程の太い熱線。箒に迫っている。

がいつまでたってもビームが私を襲わない。
何事かと思い、私が目を開けると……

私の目の前に白い鳥人が構えていた。

s i d e o u t

s i d e 一夏

箒に当たったと思ったビームは途中で遮られていた。
こんな事が出来るのはこの学園では1人しかいない！

「……………晴夏……！」

晴夏がラッシュバードのラプラスウォールで箒を守ってくれていた
！！
ないすタイミングだ！晴夏……！！

「……第！早く逃げて！！あまり……もたない……！！」
「あ、ああ！」

第が無事に退避出来たのを確認したと同時に
ラプラスウォールが敗れ、晴夏は奥に吹き飛ばされてしまった！

「「晴夏っ……！！！」」

「大………丈………夫………」

「くっそお………よくも晴夏をおお……！！！」

その瞬間、上空から十本の光が無人機を貫いた。

「晴夏さんを傷つけたんですもの。覚悟はよろしいですわね？」

「セシリア！」

「おまたせしました一夏さん！このセシリア・オルコットとブルー
ティアーズ改が来たからには勝利は確実ですわ！」

「セシリア！相手は無人機だ！遠慮なくやれ！！」

「無人機ですの！？でも今は関係ありませんわ！！さあ！踊りなさい！このセシリア・オルコットとブルーティアーズ改が奏でる円舞
曲で！」

セシリアの放ったBT兵器が無人機の関節を貫き、可動不能にする。

「もっとも、機械の貴方に私の円舞曲フルッは難しいでしょうけどね」

「これで、おわりだああああああああああああああ！！！！」

動けなくなった所を一夏が零落白夜を発動し、切り裂こうとする……

が、

ドゴオオオオオン！！

「な、なに？新手！？」

上空から現れた新手……

戦闘機のような機体が三機現れ無人機を捕獲ネットのような物で捕縛し、

そのまま無人機を連れ去っていった……

「今の……何？」

呆気にとられる三人。

「って！あのデカ乳は！！？」

「デカ乳じゃない！晴夏だ！！セシリア！！」

一夏にいわれ、箒と晴夏の所に向かうセシリア。

そこには左腕と頭部から血を流し、グッタリとして動かない晴夏と隣で泣いている箒がいた……

episode 15 乱入×混乱×蒼い零改（後書き）

神「よっ！」

はいどーも。

神「おいおい、晴夏ちゃん大丈夫なの？死にかけてるじゃん！！それにあの戦闘機は何なんだ！？」

大丈夫ですなんとかあります。

戦闘機については次回説明します。

それと次回はあんたの出番すよ。

神「マジで！？よっしゃ兄ちゃん張りきっちゃうよ！」

そんじゃここらで締めるか。

神「この小説の意見、苦情、アドバイス、感想をガンガン送ってくれ！」

次回の内容を簡単に言うと『再会』『使命』ってところかな。

神「次回もお楽しみに〜！」

episode 15 another 再会×イレギュラー×使命(前書き)

どもっ！八角ドライバーです。

更新遅れました本当に申し訳ございません。

それとPV40000突破 ユニーク5000突破ありがとうございます
います！

凡骨文ですが、お楽しみいただければ幸いです。

ではでは、どうぞ。

side 晴夏

……あれ？

私どうしたんだっけ？

たしか未確認のISの攻撃から筭を守って……

ああ、耐えきれずに死んじゃったのか。

なんかあつという間な人生だったな……

でも不思議と気分は悪くないな……

このまま寝てしまおう……

「……………きる……………」

……………？

「……………おきる……………」

なんだろう声が聞こえる……

もう少し注意して聞いてみよう……

「これで起きなきゃヤルぞ、起きる。」

数分後、落ち着きを取り戻した晴夏が青年に質問をする。

「あ、あのココは何処ですか……?」

「はあ? お前何言ってるの? 見覚えあるでしょ?」

「い、いえ……私こんな所に見覚えは……」

「いやいやいやいや、あれだけの事を俺にしといてそのポケはいらないでしょ!?!」

「アレだけの事……//」

「いや何赤くなってるのさ!?! 今何を考えたんだよ!?!」

「と、とにかく! 私はこの所に見覚えはありませんし、あなたとも初対面です!?!」

そういつてそっぽを向く晴夏

それを見てハッと何かに気づく青年。

「も、もしかして……おい晴夏! ちょっとそこに立て!?!」

「な、なんでそんなク……いいから!?!」 わかりましたよ……」

その場に立った晴夏の前に青年は移動し、晴夏の頭に手を置いた。

「……やっぱり、転生してから二日目までの記憶なくなつてやがる……」

「……?」

「おい、ちょっと我慢しろよ。ふんっ!?!」

青年はいきなり晴夏の頭をギリギリ…鳴る程に掴んだ。

「いだだだだだだだだだだだだだだだだだだだ!?!?!」

「ぬう……………」

「イタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイいた痛い！
……………」

「よし、これで思い出したはずだ、俺が誰だかわかるかー？」

「だからわからん……………あれ？」

さっきまで知らぬ存ぜぬの一点張りだった晴夏の様子が明らかに変わる。

「私は……………いや僕……………俺は……………」

「やっと思い出したぶっ!？」

いきなり晴夏が青年を押し倒し（えろくない意味で）顔を踏みつけたのだ。

「お前……………さっきはよくも犯そうとしてくれたな……………それにめっちゃ頭掴みやがって……………覚悟は出来てるんだろうな……………ああ!?!？」
「顔を踏むな顔を!?!それに见えてる见えてる!?!水色が見えてる
うううううううううううううううううううううううう!?!……………」

「っ!もう許さない……………」
「クロス!?!……………」

「え?え!?!ぎゃああああああああああああああああああああああああああああああ!?!……………」

「少し経って」

「……………（チーン）」

「てめーは俺を怒らせた…敗因はそれだけだ。」

「それが……………言いたかっただけ…で……………しょ？」

「どうせ神なんだからいいでしょ別に。」

「はいはい茶番はこれまで（全快）」

神、と晴夏に呼ばれた青年はなんとも無かったように立ち上がった。そして神が晴夏に話を始める……………

「実はな……………お前のセカイに本来いてはいけない奴ら……………まあイレギュラーだな。そいつらが存在してる事がわかったんだ。」

「あれ？それって俺の事？」

「違う、話を最後まで聞け。別に俺がそいつらを処理してもいいんだが俺はそういった類が苦手だな。善悪関係なく全てのイレギュラーを消しちまうんだ。」

「お前が処理しようとする俺も消えてしまおうわけか。」

「そゆこと。そこで晴夏の出番。こいつら潰してくれないかな？お前まだチートスロット一つ空いてるだろ？それ使って更に強化してイレギュラー潰してくれよ。」

「よし、わかった。そんじゃ残り一つはラッシュバードのラプラスウォールの強度をできるだけ上げてくれ。」

「へ？そんなんでいいの？もっと強いのにしろよ。ステータスMAXとか……………機体フルチューンとか……………」

「そんな事したらつまらないだろ？俺は自分が強くなってるって実感が欲しいの。」

そう言っつて晴夏はニツと笑う。
そんな晴夏に神は呆れて

「……………変な奴。」

神が指を晴夏に向けると晴夏が一瞬光り、すぐに光が消えた。

「これでOKだな。どの位強度が上がったかは実践で確かめてくれ」

「ああ、ありがとな。」

「それと、戻った時にお前の口調を女言葉に統一させた。違和感を感じないようにしてるから安心しろ。」

「おお、それはありがたいな！どうしようか悩んでたんだよ！！」

「それくらいサービスするさ。そんじゃそろそろお前を戻すぞ。謎のISが乱入してきた日から3日目に戻すからな。」

「何から何までありがとな！そんじゃ行ってくる！！」

晴夏は足元から粒子化して、その場から消えた。

「さて、うまくやってくれる事を祈りますか……………」

神「よっ！」

はいども。

神「いやー驚いたぜ。まさか転生前の記憶が消えてたなんてさあ」

女モードな晴夏はどうでした？

神「あれは……ヤバイな。転生前を俺は知っているからそのギャップに萌えた。それに……」

それに？

神「水色は清潔感があるな。」

この変態がつー！！

神「うっせー！！いいから締めるぞー！！」

終始gdgdじゃねーか！

この小説の、意見、苦情、アドバイス、感想をガンガン送ってくだ
さいー！

感想………感想please me……

これは違うんじゃないの！？
とか

こっつてどーゆー事？

でもいいから感想please me……

神「次回の内容を簡単に言うと『一人の転入生』だぜ！」

次回もお楽しみに！

P・S 主人公説明部分を追記しました。

どもっ！八角ドライバーです。

まず始めに……………

お気に入り件数50突破ありがとうございます！

これからは毎日家を焼こうぜ？

失礼、舞い上がってしまいました。

そしてすみません、前話の次回予告を無視しました……

こんな凡骨作者ですがよかったですこれからもよろしくお願いします。
それと後書きにプチ重大発表があります。

では、どぞ。

side???

カタカタカタカタカタカタカタカタカタ……

「さあーで、この私のゴーレム？を勝手に持ってたのはどこのどいつかな？あれは未登録のISコアがあるし、早いとこ見つけないと。」

私はいつも通りの速でキーボードを叩いて行きながらゴーレム？を逆探知する。

ピピッ

「お！もう発見したのか。まあ天才のわたしにかかればこの程度なんて事ないよね。ええっと居場所は……」

!!

いや、本当は驚いてないけど反応しとかないと君たちに悪いかなって思ってたね？

>>そいつの発言はやめてください!!<<

はいはい、わかりましたよっと。

「さてさて、まさかこんな所にあるとはねえ……………いっくんたちの事もあるし少し調べないと…」

私はすぐにハッキングを始めた。
ねえねえ！今私キマってた！？

>>だからそいつの発言はやめてください！…！<<

ちえっ、つまんないの…

s i d e o u t

s i d e ??? ? 2

「社長、例の物が……………」
「わかった。すぐに行く」

ようやく来たか……………
さて、見に行くとするか……………

「社長！こちらが……」

「ああ……これがISコア……ふふふ、素晴らしい……！」

「では社長……」

「ああ、今すぐに取りかかれ。そして計画が第二段階に進行したと彼らに伝えておけ。」

「承りました。」

ふふふ……

とうとうこの日が来たか……

篠ノ野東が未登録のISコアを所持していて、しかもそれをわざわざ捕獲しやすいような事をしてくれるのは嬉しい誤算だったな……

これで国から奪い取る様な真似をせずに済んだのだ……

博士には感謝しておこう……

さて、我々の計画はこれからだ

第一段階も完全に完了している。

さあ奏でようじゃないか。

このセカイの崩壊させる序曲を

神「よっ！」

はいども。

神「出て来たじゃないかイレギュラー。」

はい。

スパロボしをやった事ある方は既にわかっていると思われませんが……

神「ちょ、それは言わない約束だろ……」

それと始めに出て来た謎の天才……一体何者なんだ……？（棒）

神「だな……一体何者なんだ……？（棒）」

それとプチ重大発表です。

次からはこの後がきでお便りコーナーもどきでもやろうかな……
なんて思っていたり！

コーナー名は

「皆集まれ！青空放送局（仮）」
です。

神「相変わらずのお前のそのセンス………ww」

受け付けているのは

- ・この小説のキャラクター達に聞きたい事
- ・この小説のキャラクター達にやって欲しい事
- ・この小説についての質問（ネタ質問でもマジ質問でもおkだよっ！

の三点です！

いつも通り意見、苦情、アドバイス、感想も受け付けております！
皆様どうぞ奮ってご質問下さい！

晴「次回の内容を簡単に言うと『二人の転校生』です！……………本
当ですか？」

本当だよ！！

神「それと、H A L - H A Lさん！いつも感想ありがとうな！」

こらっ！もうちょっと丁寧な言い方できんのか！！

晴「あの二人が喧嘩始めてしまったので今回は私が締めますね！次
回もお楽しみに！！！」

episode 16

私達の副担任がこんなに凛々しいわけがない。

(前書き)

どもっ！八角ドライバーです。

くくく……

思いついたが吉日ですぜ。

すぐに書き上げましたとも。

シャルロット党とブラッククラブ党の皆さんお待ちしました！！
とうとう彼らの登場ですよ！

ではでは、ごきげん。

episode 16 私達の副担任がこんなに凜々しいわけがない。

side 晴夏

どうやら神（笑）が言った通り

私が意識不明になってから3日後に飛ばされたみたいです。

腐っても神という事ですね。

そして私の意識が戻ったと連絡が一夏達に伝えられ、

放課後に皆がお見舞いに来てくれました。

びっくりしましたよ。

ドアが開くなり篤さんが飛びついてきてすごく謝ってきましたから。

別に気にしてないのでなんとか篤さんに退いて貰い、

私が寝ていた三日間の出来事を一夏達に聞いています。

えー、どうやらその後

謎のISは突如現れた戦闘機に捕獲され、持って行かれてしまった。そして二人の転入生が私達のクラスに入る事になり、明日紹介される。

この二件だけみたいです。

一体何者なんでしょうか……？

あの神（笑）原作知識はあると面白くないからとか言って私の中の原作知識を全部消去したらしいです……

変な所で変な事してくれちゃって……

一回ライトニングフィストで殴られないと気が済まないみたいです
ね……………!!!

でも、なんだか疲れました。

今日はもう部屋に戻って寝てしましましょう。

私は保険医さんにお礼を言って部屋に戻って行きました。

その夜、私の事をすごく（もう過保護レベルに）心配してくれていた
た布仏さんに色々されたのは言うまでもないです よ……………ね……………
…？

side out

そして次の日のSHR…

「席に着け。ホームルームを始める」

「今日は何と転入生を紹介します」

ざわ……………ざわ……………

ざわ……………ざわ……………

「おい、入ってこい。」
千冬に言われ扉から入ってくる二人の転入生
某賭博黙示録みたいな擬音が流れた気ががえてそこはスルー。
片方は金髪、もう片方は銀髪の転入生だった。
だがそんな事は皆は特に気にしていない。
それよりも気になっていたのが

金髪の転入生が男子の制服を着ていた事だった。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。みなさんよろしくお願ひします」

そして一人の女子が呟く…

「お、男？」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を
「きやああああああああああああああああああああああああああああ
あああああ！」「つてえ？」

「男子、二人目の男子！！」

「しかもうちのクラス！！」

「美形、守ってあげたくなる系！！」

と騒ぎだした女子達。

それを見たシャルルは戸惑いの浮かべている。

そこを千冬が

「騒ぐな！静かにしろ！！」

と一喝する。

「次、挨拶をしるラウラ」

「はい、教官」

「ここでは私は教官ではない。織斑先生と呼べ」

「了解しました、教官」

「……………はあ。まあいい挨拶をしる」

そしてラウラと呼ばれた銀髪の子はクラスの方を向くと

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

それだけ述べ、口を紡ぐ。

……………

TVだと放送事故になりそうな程流れる沈黙。
それに耐えかねたのか山田先生が

「あの以上ですか？」

と聞くがそれをラウラは

「以上だ」

2011年即答大賞を渡したくなる程の速さで切り返すラウラ。
するといきなり一夏を見たかと思うとズカズカと一夏に近づいて行き

バシーンッ！

ラウラの綺麗な平手打ちが一夏の頬に決まる。

「つつっ！！何すんだいきなり！！」

「私は認めない……貴様があの人の弟であるなど、認めるものかっ
！！」

そう言って与えられた自分の席に戻り、座るラウラ。

そして千冬がナイスタイミングで

「今日は二組と合同でES実習を行う。各人着替えて第二グラウン
ドに集合。」

「それから織斑、デュノアの面倒を見てやれ、同じ男子同士だ。で
は解散！！」

「君たちが織斑君？はじめまして僕は「あくいいからいいから、移
動が先だ。女子が着替え始めるから」ってうわ／／／」

強引に一夏はデュノアの手を取った

「俺らがアリーナの更衣室で着替えるんだ。」

「実習の度に移動だからなるべく早く覚えろよ。迷って遅刻なんてなってみろ、千冬姉十八番の出席簿ハンマーが炸裂するぞ」

「う、うん／＼／＼」

「なんだそわそわしてトイレか？」

「ち、違うよ／＼／＼」

一夏が疑問に思っていると前から

「あ！？噂の転校生発見！！」

「しかも織斑君と一緒に！！」

「待って！！あの二人手を繋いでるわよ！！！！」

とぞろぞろと女子が湧いてきた
しかも後ろからも湧いてくる

「デュノア、走るぞ」

「わかった！」

そして急いで道を曲がる二人
後ろで女子が何か言ってるが二人は気にしない。

正確には気にする余裕がないのだ。

するとシャルルが不思議そうに

「なんでみんな騒いでいるの？」

「そりゃISを操縦できる男って今のところ俺たちしかないから
だろ」

「あ、ああ・・・うんそうだね」

「それじゃあ……振り切るぜっ!!」

一夏はシャルルの手を繋ぎ、某仮面戦士の決めゼリフを使って今月
一番の速さで更衣室まで駆け抜けていった。

更衣室到着までカットノ(^o^)/

「「はあ はあ」」

「あいつら…し、しつこすぎる…でも、何とか振り切ったみたいだな」

「ごめんね。いきなり迷惑かけちゃって」

「別に気にすんな、むしろ助かったと思ってるぐらいだ。学園に男子一人なんて拷問に近いからな。」

「そうなんだ…」

「これからよろしくな。俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ」

「うん、よろしく一夏。僕のことシャルルでいいよ」

「うわ！？時間やばいな、すぐに着替えちゃおうぜ」

と着替え始める一夏。
すると

「うわぁ／＼／」

と顔を隠し始めるシャルル

「早く着替えないと遅刻するぞ。千冬姉はそれは時間につるさい人だからな。」

「う、うん！き、着替えるよ。でも、その、あっち向いてて

ね？」

「いやまあ、着替えをジロジロ見るつもりはないが。なんでもいいが急げよ」

見てみるとすでにシャルルは着替え終わっていた

「な、何かな？」

「うわ、着替えるの超早いな。なんかコツでもあんのか？」

「い、いや別に。ははは」

「これ、着るときに裸っていうのがなんか着づらいんだよなあ。引っかけたって」

「ひ、引っかけたって？／＼／＼」

「おっ」

「・・・・・・・・／＼／＼」

「ん？そのスーツ着やすそうだな。」

「デュノア社製のオリジナルだよ。」

「デュノア？お前の苗字もデュノアだよな？」

「父が社長をしてるんだ。一応フランスで一番大きいIS関係の企業だと思っ」

「へえ、社長の息子なのか。どつりだな」

「ん？どつりでって？」

「いや、気品つうかいいとこの育ちって感じがするじゃん。納得した」

「……………うん」

「ってそろそろ時間だ！ヤバイ急ぐぞシャルル！！」

「う、うん…！」

side 一夏

「ではこれより一組と二組による合同IS実習を行う！鳳、オルコット！直ちにISを展開し、模擬戦の準備をしろ。」

「「え！？」」

突然名前を呼ばれた事に二人は驚いていた。

「どうして私が……………」

「なんであたしがこんな事……………」

愚痴ってる二人に千冬姉が近づき、二人にだけ聞こえるように何かを話している。

すると、

「ここはこのイギリス代表候補生セシリア・オルコットの出番ですわね！」

「専用機持ちの実力を見せつけてあげるわー！」

おお！あんなにやる気を出すなんて……

一体何を言われたんだ？

「それで？私達が模擬戦をするのかしら？まあどっちが勝つかなんて目に見えてるけどね。」

「ええ、この私の圧勝という結果がですわね。」

「そうそう……って違うわよっ！あたしの完勝に決まってるでしょ！？」

綺麗なノリツッコミだな……

鈴の意外な才能が見られた気がするぜ。

「落ち着け貴様ら。組み合わせは貴様達二人ではない。お前らが相手をするのは……この方だ。」

一体何が起きたんだ？

ふにゆ

「あつ……／／」

ん？

何か今柔らかい物を触った感覚と変な声が聞こえた気が……

ふにゆふにゆ

「ひゃああああああ／／お、織斑君……／／」

………え？

落ち着いて状況を確認すると

どうやら俺が空から落ちてきた山田先生と衝突し、第三者から見たら山田先生が俺を押し倒すような事になっており、そして俺の右手は山田先生の大きな双子山の片方を掴んでいる……

もう一度言おう。

え？

「そ／／その、ですね…／／困りますこんな場所で…／／いえ！
場所だけじゃなくてですね／／！私と織斑君は仮にも教師と生徒で
ですね！…ああでも、このままいけば織斑先生が義姉さんってと
こで、それはとても魅力的な…／／／」

山田先生……………

お花畑から戻ってきてください、ISが当たって痛いんです。

キロキロリン！！

殺気！？

俺はすぐさまどうにかしようとしたんだが山田先生が乗っているか
ら動けない……

ちなみに中の人ネタだ、気にするな！！

ビュンツ！

うお！鈴の双天牙月（あの試合の後で名前を覚えてもらった）じゃ
ねえか！この角度からしてあいつ頭狙ってやがる！！

あ、俺今日死ぬのか……………
さよなら現世、そして今から会いに行きます、神様。
俺は目を瞑ってやってくる死を受け入れた……………

バンツ！バンツ！

あれ？なんだ今の音は？
それに双天牙月がいつになってもこっちにこない……………

恐る恐る目を開けると

山田先生がいつのまにか展開し、手に持ったライフルで飛んでくる
双天牙月を撃ち落としたのだった……………

この人……………急に凜々しい顔つきになって……………本当に山田先生か？

と思っていたら一連の流れを静観していた千冬姉が喋り出す。

「山田先生、いつまでそこにいる気だ。」

「え！？あ！す、すみません織斑君！！」

慌てて俺の上から退く山田先生。
しっかし柔らかかったな……

「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。今くらいな射撃は造作もない」

「む、昔のことですよ。それに候補生止まりでしたし……」

千冬姉、「ああ」は失礼だよ……たしかにそうだけども……

オルコット・鳳。いつまで惚けておる。さっさと用意をしろ。」

「え？あの、二対一で……？」

「いや、さすがにそれは」

「安心しろ、今のお前達ならすぐ負ける」

「「む………」」

どうやら今の千冬姉の言葉で二人は少し頭にきたみたいだな。

「山田先生？私は手加減はしませんわよ？」

「そうよ？先生がどうしてもって言うなら手加減するけどね。」

「いえ、その必要はありません。お一人の全力を込めてかかってください。」

「むむ……………」

……………本当に山田先生なのか？

s i d e o u t

episode 16 私達の副担任がこんなに凛々しいわけがない。(後書き)

あーあー、テスト。

集まれっ！

皆「青空放送局〜!!!」(仮)

さあ始めました。

記念すべき第一回目の放送でございます。

でもその前に……

HAL-HAL様ご感想ありがとうございます！

番組進行は私、八角ドライバーと毎回、本編のキャラを一人ゲストに呼んで進行させていただきます。

今日のゲストは……

第一回とepisode 15 another以外に本編に出番がない！

神様(笑)です！

神「よっ!」

さてさて、早速お便りを紹介して行きたいのですが……

神「さりげなくスルーすんなよ！それと人の気にしてる事をさらっ
と言っなっ！！！」

ああ、すみません。

何なんせこーゆー事は初めてですから。

神「……………」

ええと…そうだそうだ。

お便りを紹介して行きたいのですが……

まあ前話からそれ程時が経っていないし一通も来てないのは当たり前
前ですね。

なので今回はepisode16の裏話を書いてみました！

神「おお、それは楽しみだ。」

それではござ。

ええつとおはようございます。

山田真耶です。

上から読んでも下から読んでも……ってやつです。

今私が何をしているのかというと……

織斑先生と一時限目に行く一組と二組の合同IS実習で行う模擬戦の話をしています。

でもどうやら先生は私が登場する際にインパクトが欲しいらしく……私がどう登場するかを話しているわけです、はい。

織斑先生、なんだかかかつてない程にイキイキしています。

こーゆーのが好きなんですか？

「山田先生、地面から出てくるのはどうだろうか？」

「え、えつと……それは少し無理があるかと……」

「では姿を消して、私が合図した時に姿を表す。というのは……」

「私のラファールにそんな機能はないのですが……」

「ならば突然校舎が爆発、そして煙の中から姿を表す。というのは……」

「校舎は爆破させてはダメですよ織斑先生!？」

「わがままだぞ山田先生!」

「わがままじゃないですよ!普通に展開するだけでいいじゃないですか!?!」

神「あーゆーの好きなんだろうか？」

知らん。

実は言うつとノリで書き上げた。

神「おい！！」

さて今回の青空放送局はここまで。

そして青空放送局では皆様の以下の四つのお便りをお待ちしております。

- ・この小説のキャラクター達に聞きたい事
- ・この小説のキャラクター達にやって欲しい事
- ・この小説についての質問（ネタ質問でもマジ質問でもおkだよっ！
- ・このラジオもどきの題名。

投稿方法は

- ・今回の話の予告を行った活動報告へのコメントに記載。
- ・感想の一言の一覧に記載。

の二点の方法です！

神「いつも通り意見、苦情、アドバイス、感想も待ってるからガンガン送ってくれよな！」

次回までに質問を送ってくれたリスナーさんには番組特製ラッシュボードをイメージした携帯ストラップをプレゼント！！

神「これであなたもラッシュボードが展開できるかも？！（注！実際に展開できません。ご了承下さい。）」

×切は9/14日23:59分までとさせていただきます！
皆さんドンドン送ってね

次回の内容を簡単に言っと『模擬戦』『昼ご飯』です！
それでは皆さん！次回の放送でお会いしましょう！

神・八「さようなら〜!!!!」

うん。

やりすぎたこれはひどいwww

episode 17 はいあーん 爆ぜる。(前書き)

どもっ！八角ドライバーです。

書いた文章を読み返して思った事があります。

「これ本当に山田先生か……？」

「一応R-15指定入れてるし……きつと大丈夫だよね？」
それと目の前でイチャイチャするカップルは爆ぜればいいと思うんだ。

ではでは、どぞ。

episode 17 はいあーん 爆ぜる。

side 晴夏

す、すごい山田先生……

セシリアと凰さん相手にはほぼ互角の勝負を持ち込んで、しかもペー
ースは完全に握っている……

共闘した事がない二人だけ専用機持ち、それに狙撃型と中距離格
闘型のタッグが相手なのに……

二人を圧倒している山田先生に釘付けになっている所で織斑先生が
突然口を開いた。

「よし、デユノア。山田先生が使っているISについて説明してみ
せる。」

「了解です。山田先生が使っているのはラ（ry） 作者が書くのが
めんどい」

むむ……

今なんだか酷い手抜きを感じた気がする……

「よし、デユノア、それぐらいで十分だ。む……どうやら一人落とさ
れたようだな。」

織斑先生がそう言い、皆が顔を上げると凰さんが落とされて落下し

ている所だった。

ってなんで頭から落ちてるの！？しかも制御が効かないみたいだし

……

ああ、もう！

「ラッシュバード！！」

私はラッシュバードを展開し、落下ポイントまでダッシュする。

いくら絶対防御があっても頭からの落下はマズい……………！

「ラプラスウォールを応用すれば！このお！！」

私はラプラスウォールを広域発動させて鳳さんを受け止めた！

どうやら成功したみたいで、ウォールに触れた途端落下速度が緩やかになり、私は落ちてくる鳳さんをしっかりと両手で受け止めた。

「鳳さん大丈夫！？

「デカ乳……………！」

「怪我とかしてない！？」

「あんたバカア？ISには絶対防御があんのよ？あれ位大丈夫に決まってるじゃない……………」

「でも幾ら絶対防御があっても頭から落ちたら危険だよ。それに女の子なんだから顔は大切にしないと……………」

「……………」

「でもその様子じゃ大丈夫みて「鈴」え？」

「鈴よ、鈴って呼んで。あんたの名前は？」

「……………！！内海晴夏。晴夏って呼んでね！鈴……………」

「OK、よろしく晴夏……………」

そういえば自己紹介したのはこれが初めてだなあ。
うん！仲良くなれるといいな！！

「ま、参りましたわ……………」

どうやらセシリアも負けちゃったみたいだね…

その後、訓練機ISで乗り方や動かし方の訓練が始まり
専用機を持つ私と一夏とセシリアと鈴音とデュノアさんとボーデヴ
イツヒさんが教えることになりました。

女子達は一夏とデュノアさんを目当てに集まってきたけど、織斑先生の一喝により静まりました。
織斑先生……………凄すぎます…

side out

side 一夏

実習が終わった後、

俺は箒に昼飯と一緒に食べないかと誘われた。

勿論、承諾したぜ。

一人より二人で食べた方が楽しいからな。

でもどうせなら鈴とかセシリアとか晴夏とか呼んだ方が楽しくなるかもな！

よし、早速誘ってみるか！！

side out

そして昼休みの屋上。

箒と鈴がメンチをぶつけあっており、それをオロオロと見つめる晴夏とシャルル。セシリアと一夏は昼食の準備をしていた。

「何故貴様がここにいる……！！！」

「それはコツチのセリフよ……！！！」

「「あ、あの……二人共？」」

「「お前（あなた）達は黙ってる（て）！！！」」

「おいおい、何やってんだ二人共。早くしないと飯の時間なくなるぞ？」

（元は君のせいなんだよ、一夏！）

そんなこんなでなんとか落ち着き昼食を食べる一行。

その後、箒と鈴によるお弁当構想が勃発し、一夏が箒に「はいあー

ん」をするなどがあつた。

そして事件は起きた……………

「んんっ！晴夏さん？私、実はサンドイッチを作ってきたんですよ？もし良かったら……………食べませんか？」

そう言つてセシリアが開けたバスケットの中には綺麗なサンドイッチが詰められていた。

「うわぁ……………美味しそう……………それじゃあ一つ貰うね？」

はむっ

「！！！？美味しい！私の大好きな味だよ！！！」

ピクッ

その言葉に反応する一夏。

「そ、それは良かったですわ！！（ホッ……………）」

晴夏があまりにも褒めるので思わず気になる筈、鈴、シャルル。

「そ、そんなに美味しいのか？」

「うん！筈達も食べてみなよ！！！」

「そ、そんなに言うなら……………一つ頂くぞ。」

「あ、ちよつと筈さん！！！」

「！？箸！やめるおおおおおおおおおおおおお！
！」

何故か叫ぶ一夏を他所にサンドイッチに大きく齧りつく箸。
すると……………

「甘ああああああああああああああああああああああ
ああああああ！？！？！？」

大声を出し、突然倒れる箸。
それを見た一夏は

「やっぱりな……………すっかり忘れてたよ……………」

「どうゆう事なの一夏??？」

「ああ、皆は知らなかったな。晴夏は極度の《甘党》なんだ。セシ
リアー口貰うぜ……………うん甘い……………」

そう、晴夏は甘党なのである、それも極度の。

「う、嘘でしょ……………なにになんでこんな体型なのよ……………!??」
どうやら鈴には甘党よりも甘党なのにこの体型という事が気になる
ようだ。

「もきゅもきゅ……………うん……………もきゅもきゅ……………私って太りにくい
体質らしいから……………」

それを聞き、絶句する鈴。

「何よ！何なのよ！！少し寄越しなさいよそれ！！」

泣き顔になりながら晴夏に飛びつき晴夏の胸を乱暴に揉み始める鈴。突然の事にわけがわからず困惑し、されるがままになる晴夏。

「ちょ、ちょっと鈴！？や、やめ……………あつ／／／そんなにつ……………／
／強くしちゃ……………／／／らめらよお……………ふにゃあ……………／／／／」

結局晴夏は昼休みが終わるまで鈴にやりたい放題されて、午後の授業は欠席する事になる。

ちなみにセシリアは若干恨めしそうな目でその光景^{セクハラ}を見ており、一夏はシャルルに目隠しされている。篝は……………未だに意識が戻っていないかった。

episode 17 はいあーん 爆ぜる。(後書き)

あーあー、テストス。

集まれっ！

皆「青空放送局」!!! (仮)

さあ始めました。

第二回目の放送でございます。

番組進行は私、八角ドライバーと毎回、本編のキャラを一人ゲストに呼んで進行させていただきます。

今日のゲストは……

我らが主人公、内海晴夏さんですっ!!!

晴」……………」

おやおや、どうやらまだ意識が完全に戻ってないようです。
でも気にせずに進めて行きましょう!!

それではお便りを紹介して行きたいと思えます!

(……………え?き、来てない?一通も??ま、まじで!?)

え、ええつと……
それじゃあちよつと今後の予定でも話そうかと……

晴夏の恋愛描写なんですけど、ワンスマーと結ばせる気はないんですよね。

なので新しくオリキャラ出そうかそれとも恋愛させないか迷ってます。

晴夏「私、男でしたけど女性としての恋愛はしたいですが……」

あ、戻ってきた。

晴夏「でも恋愛描写って難しいとよく聞きますよね……」

ああ……俺はプロじゃないしな。

さてどうしたものか……

晴夏「なんです。この間は……」

あれだ。

放送事故だ。

もう話すネタがないっ！

晴夏「偉そうに言える事じゃないですからね!?!」

もういいや締めちゃえ!!

晴夏「これ色々で見直した方がいいんじゃないかな……?」

さて今回の青空放送局はここまで。

そして青空放送局では皆様の以下の四つのお便りをお待ちしております。

- ・この小説のキャラクター達に聞きたい事
- ・この小説のキャラクター達にやって欲しい事

- ・この小説についての質問（ネタ質問でもマジ質問でもおkだよっ！
- ・このラジオもどきの題名。

投稿方法は

- ・今回の話の予告を行った活動報告へのコメントに記載。
- ・感想の一言の一覧に記載。

の二点の方法です！

晴「意見、苦情、アドバイス、感想も受け付けております！ガンガン書き込んでください！！」

次回までに質問を送ってくれたリスナーさんには番組特製ラッシュボードをイメージした携帯ストラップをプレゼント！！

晴「これであなたもラッシュボードが展開できるかも？！（注！実際に展開できません。ご了承下さい。）」

×切は9/20日23:59分までとさせていただきます！
皆さんドンドン送ってね

次回の内容を簡単に言つと『訓練』です！

それでは皆さん！次回の放送でお会いしましょう！

八・晴「さようならっ！！！！」

どもっ！八角ドライバーです。

デュノア先生は本当に学園の教師になればいいと思うんだ。

それと後書きがテラ長い。

番外編として分けた方がいいかな？

でも分け方わかんないwww

それとHAL-HAL様、e.j.g.t様感想ありがとうございます！
では、どぞ。

episode 18 デュノア先生の世界一受けたいIS授業！！！

土曜日。

一夏は午後のアリーナ全面開放を利用してデュノア先生からISについてのレクチャーを受けていた。

デュノア先生に教えてもらうまでは数々の先生達のレクチャーを受けたのだが……

「こう、ドン！としてガッ！ときてドガンッ！ガキン！ガッン！って感じた」

「なんとなくわかるでしょ？感覚よ感覚。はあ？何で分からないのよバカ」

「そこで急停止して身体を左に十度傾けてから右方向へ旋回軌道ですわ」

「これをああしてそうしてこうすれば……ほら出来るでしょ？え、出来ない……？」

とまあ実にユニークでわかりづらいレクチャーだったと一夏は思った。

だがデュノア先生の説明は実にわかりやすい。

今までが今までだったせいかな

一夏は涙を流しながら真剣に取り組んでいた。

> 一階廊下<

晴夏は走っていた。

背後から迫り来る二つの影から逃げる為に。

女子平均から見て体力は中の下に位置付けされる晴夏だがこの時は違った。

「待ちなさああああああああああああい!!!!」

「待ったら（主に貞操が）危ない……!!」

そう、晴夏は鈴とのほんさんに追いかけて回されていたのだ。

「今日こそその肉塊を私にいいいいいいいいいい!!!!」

「はるん！この前休んで補給してない成分を今摂取するよ!!」

「もう嫌あああああああああああああああああああああ！」

「！」

果たして晴夏は捕まったら（貞操が）死亡、ルール無用時間無制限の現実鬼ごっこをどう逃げ切るのか……

>アリーナ<

「ボーデビツビだっけ？悪いけどお前とは戦う理由がない。だからお前とは戦わない。」

「ボーデヴィツヒだ！それに貴様になくても私には戦う理由がある！！」

「ああ悪いな、モーゼヴィツヒ。また今度にしてくれ。今訓練中なんだ。」

「ボーデヴィツヒと言っているだろうが！！」

今にも海を真つ二つにしそうなオーラを出すラウラ（本当は怒りではなく神の力で割ったと伝えられています！！）
すると何かに気づいたような素振りを見せ、突然臨戦体制に入るラウラ。

「なるほど……自分には戦闘意思がないと言いつつさりげなく相手を挑発し冷静さを欠かせて突然攻撃してくる所をカウンターで一気に決めるといふ策だな……？」

「は、はあ？お前何言ってるんだよ！？」

「だがその策は失敗に終わったようだな……！だが貴様に戦闘意思がある事が十分伝わった！ではこちらから行くぞ！！」

そう言うと同時にラウラのISの右肩の実弾砲が一夏に火を吹く！！

突然の出来事に一夏は反応が出来ず、一夏に実弾砲が直撃する……

と思われたが一夏に当たる事はなかった。

突然、一夏の目の前がいきなり裂けてラウラの放った実弾砲はそこに吸い込まれていったからだ。

「「「!?!?!」」」

突然の出来事に動揺を隠せない一夏達。

だが空間の裂け目はすぐに消え、そして目の前には全身装甲の漆黒フルスキの黒鳥が現れた。

「な、なんだお前は!?!」

「い、一夏!直ぐに先生達を!?!」

突如現れた黒鳥に警戒するラウラとシャルルだが一夏は違った。武器も展開せずに黒鳥に近づくとまるで友達に話しかけるように会話を始めた。

「晴夏! どうしたんだいきなり??」

すると黒鳥が光になって消え、その場には晴夏が現れた。

「あ、一夏! ここは……?」

「アリーナだぞ。でもなんでイマジナリロードを使ったんだ?」

「ちょっと……ね? でも何も不都合が起きなくてよかったよ。展開とほぼ同時に突入したから……」

「いや、不都合と呼べるかわからないが晴夏が現れる前に変な裂け目みたいのが出て来たぞ。まあ俺はそのおかげで助かったけどな。」

「

ちなみにラウラとシャルルは完全に蚊帳の外だったりする。すると突然ラウラが大声で

「ふ、ふん! 興が削がれた……!」

と言い残しピットに戻っていった…

「何だったんだ? あいつ……!」

一夏が首を傾げていると後ろから聞き覚えのある大声が聞こえてきた。

「見つけたわよ晴夏!」

振り向いた先には鈴が仁王立ちしていた。

「さあ！観念してその肉塊を寄越しなさい！！」

某速さを追い求めるラディカルでグッドなスピードを持つアニキ真つ青の速度で晴夏に向かって走り出し一気に距離を詰める鈴。

そして鈴のウネウネ動く手が晴夏に触れようとしたその時！

『その酢豚！何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え！』
監視をしていた教師の声がスピーカーを通してアリーナに響き渡る。

「ちっ、あと少しだったのに……………てか酢豚って何よ酢豚って！！」

そして鈴はどこからともなく現れた教師陣に連行されアリーナには晴夏、一夏、シャルルが残った。

緊張の糸が切れたのか晴夏は突然泣いて一夏に抱きつく。

「いちかああああああああああ！！怖かったよおお……………」

「わかった！わかったから落ち着け！その…当たってるから！！」

そう、晴夏があまりにも一夏に密着しているから二つのメロンが一夏の胸板に当たっているのだ。

自分の胸板の上で潰れている二つの大きなメロン…

いくら鈍感な一夏でもこれには参ってしまう。一夏は思わず顔を背

ける。

だが恐怖で何かが崩壊している晴夏にはそんな事関係なかった。そして抱きつく力が少しづつ強くなっていくと同時に胸板の柔らかい感触も強くなっていく……

この光景を見ていたシャルルは苦笑いでその場を去ろうとする。

「あ、あはは……それじゃあ一夏、お先に〜……」

「ま、待てシャルル！！せめて晴夏を引き離してくれ！！いやもう少し楽しみたいけど！！って何言ってるんだ俺は！！シャルル！？シャルルウウウウウウ！！！！」

そんなこんなでIS学園は今日も平和である。

だが更衣室でシャルル（結局逃げた）が一言呟いていたのは誰も知らない……

「あれがイマジンナリロード……か」

あーあー、テストス。

決めるぜ！

皆「Radio into the SKY！！！！」
レディオ・イントゥ・ザ・スカイ

さあさあ始めましたRadio into the SKY略してRSKY！

番組進行は私、八角ドライバーと毎回、本編のキャラを1人ゲストに呼んで進行させていただきます。

番組名はユーザーネームHAL-HALさんが執筆している小説

IS>インフィニット・ストラトス<月明の守護者

（以後月明の守護者と呼ばせていただきます。）

の主人公、奈々瀬ユウ君からいただきました！
素晴らしいアイデアありがとうございます！！

それでは今回のゲストをお呼びしましょう！

主人公なのに最近エロポジが定着していて非常にどうしようか悩んでいます！

そう！今回のゲストも我らが主人公内海晴夏です！！

晴「これが殺意の波動なんだね……」

ちよ、おま危ない!!

それでは早速お便りを紹介していくぜい!

ユーザーネームHAL・HALさんと月明の守護者のキャラクター達からのお便りをだぜい!
結構数があるから一つづつ答えていきます!

晴「昇格ヒロイン、そして八角さんのお気に入りキャラの河井和花さんからの質問です。『内海さんのパジャマはどんな柄ですか?』
水色ですね!あとは……布仏さんが着ぐるみを無理矢理……なんでもないです。」

水色……大空みたいでいいじゃないか!

そんじゃ二つ目いつてみよー!

ユウ君のおお姉さんの奈々瀬ユイさんからの質問だ!

『はいはいはい! 晴夏ちゃんのパンツの柄は何ですか?』

晴「パ……?!?!?!?」

あらら……真っ赤になっちゃったよ!

ちなみに今日の色は白「いやあああああああああ!」

ゴデュファ!!

しばらくそのままでお待ちください

で、では次の質問を……

晴「次は月明の守護者の主人公、奈々瀬ユウくんからの質問です。

『性転換して一番困った事って何ですか？あともし舞踏会に出るならドレスを着ますか？それともタキシードを着ますか？』実はあの神（笑）のミスで転生二日目で前世の記憶を忘れていたので……記憶戻した後も神（笑）が調整してくれたので……違和感を感じてません。強いて言うなら鈴と布仏さんでしょうか……」

つまりは作者のご都合sゲフンゲフン

晴「舞踏会ですか……こんな見た目ですしタキシードは……無理ですね。あまり派手過ぎないドレスを着たいです。」

着たら鈴と作者が気絶するだろうがなっ！

さて次の質問はHAL-HALさんからの質問だ！

『男の娘という人種について意見を聞きたい』

晴「なかなかユニークな設定ですよ。でも現実ではドン引きされますよね。よっぽど可愛い顔立ちじゃない限りは。」

あれって初めは誰がやったんだろうな？

私は最近映画化した少年日曜日に連載中の借金執事漫画だと思うんだが……

晴「どうなんでしょうね……？」

さて、質問はこの辺にしてユーザーネーム自分不器用ですからさん
発案の新企画

「どっちの粗品ショー」

を始めるよ！

自分不器用ですからさんありがとうございます！

簡単に説明しますと二つ何かが出てくるのでどっちを選ぶかですね。
まあ何が出て来ても文句はなしですが……

ちなみにこれ、二人じゃつまらないから本編キャラ全員呼んでそい
つらに食べさせます（黒笑

さて今回選ぶのは……

「リリなの代表・シャマルの青鍋」

*自然界ではありえない青色の粘着性スープ鍋。材料？もとは
食べられたであろう物です。

「テイルズ代表・アーチエの作った薬膳鍋」

*薬膳といいつつ不明な野草やら材料を詰め合わせて煮込んだ
説明しがたい匂いと混沌色の鍋。

皆「うっ……」

さあ選べ！選べ！選べ！！

ちなみに私は食べません。だって番組進行がいなくなっちゃうもん

（数分後）

さてさて皆がどっちを選んだのか発表するよ！

シヤマルの青鍋

一夏、千冬、鈴、シャルル、ラウラ

アーチエの薬膳鍋

晴夏、神（笑）、セシリア、のほほんさん、山田先生

さあ皆さん用意はいいですか？

それでは一気にどうぞー！！

ガツガツガツガツ……

皆「ンゴパツ！？」

見事に皆ノックアウト！

あの千冬さんすら一撃なのだから恐ろしい……

さて今回の青空放送局はここまで。
そして青空放送局では皆様の以下の四つのお便りをお待ちしております。

- ・この小説のキャラクター達に聞きたい事
- ・この小説のキャラクター達にやって欲しい事
- ・この小説についての質問（ネタ質問でもマジ質問でもおkだよっ！

投稿方法は

- ・今回の話の予告を行った活動報告へのコメントに記載。
- ・感想の一言の一覧に記載。

の二点の方法です！

意見、苦情、アドバイス、感想も受け付けております！
ガンガン書き込んでくださいね！

次回までに質問を送ってくれたリスナーさんには番組特製ラッシュボードをイメージしたストラップをプレゼント！！

HAL・HALさん、ユウさん、ユイさん、和花さん、自分不器用ですからさん達には番組特製ラッシュボードストラップをプレゼントします！

これであなともラッシュボードが展開できるかも？！（注！実際には展開できません。ご了承下さい。）

×切は9ノ28日23:59分までとさせていただきます！
皆さんドンドン送ってね

次回の内容を簡単に言っと『シャルル』『約束』です！
それでは皆さん！次回の放送でお会いしましょう！

ハ「さようなら〜！〜！」

あ、もしもし？1119番は「ちらぶでよろしいですか？実は……

episode 19 シャルル・デュノア 前編（前書き）

お久しぶりです。

八角ドライバーです。

言いわいたわいたけ事は後書きに纏めました。

ではでは、ごき。

episode 19 シャルル・デュノア 前編

「あ、ボディソープ切れた。」

俺、織斑一夏は今風呂に入っている。

「やっべー、シャルルまだ入ってないからなー。さっさと取りにいかないと……えっとどこで貰えるんだっけ？」

髪も乾かしたし、シャルルが帰ってこないうちにさっさと取りにいかないとなあ。

「よし、善は急げだ！ 今すぐ取りに行こっつ！？」

ドアを開けて外に一步踏み出したその時、俺の左脇腹に衝撃が走った。

「いつつ……って晴夏!？」

そう、俺の左脇腹に突撃してきたのは晴夏だったのだ。

「一夏!？　そ、そうだ、匿って！　早く！早く!!！」

「え？え？なんかしらんがわかった!!とりあえず入れ!!！」

よくわからないままに俺は晴夏を部屋に匿う。

晴夏が部屋に隠れてすぐにのほほんさんと鈴が猛スピードでこちらに向かってきた。

そして俺の目の前で止まり、まるで獲物を見失った狩人のような目でこちらを見て話かけてきた。

「おりむ〜、は〜るん知らないかい？」

「一夏！」

隠すと良くないわよー!!」

「し、知らない！」

少なくともこっちには来てない!!」

「「チツ……………」」

二人は走って来た方に戻って行った……

「……………行ったぞ。」

「ふう……………ありがとう一夏。」

「とは言ってもあの様子じゃしばらくは危険だぞ?」

「そうなんだよね……………困ったな……………」

晴夏はマジで困っている。

「と、とりあえずしばらくはここにいたらどうだ？」

「ほ、本当にいいの!?!」

「もちろんだ! 困った時の助け合い、だぜ？」

「ありがとうー夏!」

「TVとかは好きに使っても大丈夫だから、俺ちよつとボディソープ取りに行つて来るからシャルルが戻つて来たらそう伝えてくれ!」

そして俺はボディソープを取りに言った。

うんうん、やっぱりいい事をすると思持ちがいいな!

あわわわ……

つい勢いで言っちゃったけどこつて異性の住んでる場所なんだよね……

い、いやいや！

私だって元は男だしこれくらい大丈夫な筈……

ダメだどうしても緊張してしまう……

どうしてあの神（笑）はこーゆー所まで女らしくするのかなあ……

>その方が面白いだろ <

うっさい馬鹿神！

「出てくんない！！」

「えっと……晴夏？」

「……ふえ？」

あ、あれれ？

なんで僕と一夏の部屋に晴夏がいるのかな？

しかもなんだか顔が赤いし……

部屋を間違えてる、なんて「出てくんな！」うわあ！

と、とりあえず声をかけてみようかな。

「えっと……晴夏？」

「……ふえ？」

どうやらこつちに帰ってきたみたいだね。
それじゃあまずは……

「なんで僕達の部屋にいるのかな？」

「え、えっと実はそのかくかくしかじかで……」

な、なるほど。

それはなんというか……

同情するよ、晴夏。

「それじゃあ僕はシャワーを浴びるけど覗かぬ覗かないよっ……！」
う、うん。それじゃあ」

まあ晴夏はそんな事しない様に見えるから大丈夫だと思うけど……

び、びっくりしたあ……
いきなりシャルルが話しかけてくるんだもの。

絶対変な人だって思われたらうな……

それに最近の異性が同じ空間にいるのにシャワーを浴びるってちょっとまずいんじゃないかな？
それとも最近の男性はそんな感じなのかな？

あれ？

たしか一夏がボディソープ切れてるって言ってたよね！？

ま、まずいよまずいよ！！

どうする私、どうする私！？

ふと手元に現れた三枚の紙には左から

「注意」

「放置」

「逃走」

ってそうじゃなくてこんな事してる場合じゃないよ！

ああどうする私、どうする私！？

「おいーっす。晴夏いるかー？」

ナイスタイミングだよ一夏!!

「一夏! ボディソープを早く!!」

「な、なんだあ?」

「いいから早く! シャルルがもう入っちゃったから!!」

「お、おうわかった! シャルル、ボディソープ切れてるから詰め替えを……………」

あ、あれ?

ドアを開けた一夏の様子がおかしい……

一夏はしばらく固まってからボディソープをシャルルに渡したらしく、ドアをゆっくりと閉めてこちらに戻ってきた。

「い、一夏? どづしたの?」

私の問いに「夏はゆっくりと答える。」

「シャルルが……女だった………」

………
..っ

episode 19 シャルル・デュノア 前編（後書き）

前話から約一ヶ月……

改めましてお久しぶりです。
八角ドライバーです。

なんというか……
本当に申し訳ない………

スランプって恐ろしいです。
全く書く事ができませんでした。

本当は一話で終わらせようと思ったのですが纏める事が出来ずに二
部構成となりました。

なぜかこういう時に限ってバカテスのネタが浮かんで来たりO V E
R M A N キングゲイナーのネタが浮かんで来たり………

どんどんと次回作の候補が増えていくんです………

次からはこうならないように気をつけます。

そして投稿から一時間後にアンケートをとろうと考えております。

それではまた一時間後に。

またっ！あんけーとを取ります。（前書き）

どもっ！八角ドライバーです。

前話投稿から一時間後の投稿ですので
前話を読んでない方はそちらをお先にお読みください。

あんけーとを取ります。

これで二回目ですね。

詳しくは本文にて。

ではでは、ごきげん。

またっ！あんけーとを取ります。

なんとかスランプ卒業です。

どうも、作者の八角ドライバーです。

神（笑）「最近、名前の最後に（笑）が付いてかなり悲しい神（笑）です。」

はい、アンケートを取ります。

神（笑）「今回のアンケート内容は”晴夏の恋愛相手”だそうだ。」

以下の選択肢の中から一つお選びください。

- 1・作者が嫌でも自分は一夏ハーレムにツッコむ事を所望するっ！
- 2・神（笑）をなんとかして相手にしようぜ。
- 3・いやいやいやいや、ここは弾君だろ。
- 4・もう一人オリキャラ考えちまえよ

5・相手などいらん、リア充爆殺される。

この選択肢の中からお選びください。

3か4に投票する時、名前のアイデア一緒に教えてくれるともしかしたら使われるかも……

投票方法は

感想

活動報告「一ヶ月ぶりの更新報告のコメント欄」

私宛のメッセージ

をお願いします。

期限は11月末までです。

神（笑）「皆ドンドン投票してくれ！もちろん、この小説の意見、苦情、アドバイス、感想も待っているぜ！」

今回は「シャルル・デュノア後編」です。

次回もお楽しみにっ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1770v/>

インフィニットストラトス～青空に向かって歩け～

2011年10月24日02時08分発行